

1月3日

「恵みと知識において成長する」

Ⅱ ペテロ 3:18

武安 宏樹 牧師

① 恵みについて

恵みとは一言で言えば、救われるに価しない罪人に示される神の好意です。神を知るとは、男と女が互いを知るように、個人的になされる交わりです。明確な確信に至るまでに、大なり小なり心にストンと落ちる体験があります。いわゆる聖霊体験ですが、救われた時だけでなくこの恵みを受け続けるなら、キリストから離れ、教会を後にすることはありません。信仰は恵みの生活で、私たちが神の好意を得ようと努力する以前に、どう受け取るかが重要です。救われし時の純心さに戻るのは難しくとも、優先順位を神第一に変えるのは、今でも可能です。恵みは黙想以外の仕事や勉強や家事の時間にも働かれます。あらゆることを通して、恵みは自由に主体的に働かれることを覚えましょう。

② 知識について

この莫大な恵み全ては無理でも、少しでも漏らさず受け止めたいものです。そのため必要なことは「知ること」「知識」と、本書冒頭で強調されます(1:2)。恵みだけでは制御が効かず、知識だけでは朽ちるばかりで、両方が必要です。人によってどちらかが得意でしょうが、不得意な方面も学ぶと釣り合います。違ったアプローチから聖書を読み、また独学でなく祈禱会も出席することで、バラエティに富んだ分かち合いから、神を知るだけでなく、人を知ります。信仰が成長する人の共通点は素直で謙遜なことで、神を知る手段は様々です。聖霊の賜物が各人違うのだから、御言葉に聞きつつ自由に主体的な奉仕者で、あらゆる角度で勉強&奉仕し、恵みの長さ&深さ&高さ&広さを知りましょう。

③ 成長について

原文では「成長しなさい」が文頭、「イエス・キリストの恵みと知識において」が条件節として続きますが、これを個人的にくださった恵みと知識と取るか、キリスト御自身の恵みと知識と取るか、二者択一ではなく止揚させることで、神秘的信仰や硬直化した神理解から解放されて、バランスと謙遜さを保った成長が可能です。「生まれたばかりの乳飲み子のように」(Ⅰペテ 2:2)成長して、「神のみこころに関する真の知識に満たされますよう」(コロ 1:9)願いましう。

1月10日

「同じ者として」

I ペテロ 5:1
武安 宏樹 牧師

前章は五地方の信徒が苦難の足音に動揺する中で、心構えが説かれますが、本章はその流れを受けて、長老たちへの勧めへと入ります。旧約時代から、荒野を旅して民を率いるモーセが、70人の長老に重荷を分かち合ったように、新約時代は、財務や代議員や牧会教育も務めました(使 20:28/ I テモ 5:17-19)。本節で注目すべき点は、この長老たちを前にどのような目線で語るかでした。

①「同じく長老のひとり」

聖書中ここだけに登場する珍しい原語で、同じ立場であると強調します。使徒だからと言って、終わりの日のさばきも免除されず、完全に聖化されたわけでもない、一信徒に変わりないと。巡回と教会内務で役割は多少違えど、同じ長老だと。キリストのからだとして、フラットな同属意識に訴えました。

②「キリストの苦難の証人」

「復活の証人」(使 1:22)だと、ユダの後任として使徒の權威性を帯びますが、「苦難の証人」だと、彼らの苦しみも自分と共有していることを訴えながら、慰めと励ましを提供したかったのでしょう。この表現の方が断然響きます。華やかな証しよりも、苦労話&失敗談の方がホッとすることが多いものです。実際主イエスも郷里伝道に失敗し、弟子に裏切られ、世から攻撃されました。ペテロは変貌山も復活も見ましたが、それ以前に散々主を苦しめてきました。試練の中で落ち込む人を励ますには、苦労話で同じ目線に立つのが大事です。

③「やがて現れる栄光にあずかる者」

前の二点だけでなく未来志向が大事で、最終的な栄光である再臨を待望し、共にあずかる者という仲間意識です。個人的次元では共に聖化の途上にあり、栄化のゴールに向かって前進する者です。「あずかる」=主にある交わりです。苦しみも喜びも、賜物も財産も、共に分かち合うのが初代教会の力の源泉で、地上的身分&苦しみを入口にしつつ、ペテロの目的地はあくまで再臨でした。昇天直後に呆然とした彼は、約束を聞いて喜びました(使 1:11/ルカ 24:52-53)。神と人、天と地の間に立つ主の使徒として、ペテロは「同じ者」と訴えました。

1 月 17 日

「自分から進んで、心を込めて」

Ⅰ ペテロ 5:2-3

武安 宏樹 牧師

①「自分から進んで」

当教会で長老職に近いのは、一期二年再選なしではありますが、役員です。役員会では牧師の言うがままではなく、互いに意見し考えて教会を支えます。責任も伴い楽ではありませんが、受けると大きな恵みがあります(Ⅰ テモ 3:13)。教会によって残念なことに辞退合戦となるようですが、「自分から進んで」は、大事なことです。それはかつてのペテロのような出しゃばりの推奨ではなく、「神に従って」荷が重い大役も御心ならば、主の助けを期待して受けるのです。

②「心を込めて」

前項が受ける段階なら、こちらは受けてどのように関わるかの動機です。この原語に「喜んで」「熱心に」「てきぱき」の意がありますが、「卑しい利得～」の反対に捉えれば、利得を度外視し犠牲を払う奉仕を想像します(ヒリ 2-4:)。主イエスは高貴な神の御子であるのに、喜んで罪人の形で苦難を負いました。地上の富を選ぶなら、荒野で悪魔の誘惑に従った方が楽に全て得られました。しかしこれらに囚われるならば、奉仕者として必要な聖霊の力は湧きません。主イエスは隠れた奉仕にも、天の報いがあることを約束しました(マタ 6:1,4)。目立たない奉仕に、人間的見方を超えた神の視点で重要な意味が含まれます。取るに足らない者という謙虚さと共に、賜物を自覚して喜んで用いましょう。

③「群れ の模範に」

内面の動機から外面への行動へ展開します。「割り当てられている人たち」(英欽定訳「神の遺産」)つまり自分で得たものでなく、神から預かった物との、認識が大事です。この語は特選の民イスラエルにも、用いられます(申 9:29)。「支配する」とは、力づくで支配&征服し、部下を服従させる意味があります。長老はじめ聖職者が強権的手法をふるう教会が、跡を絶たないと言われます。支配的かそうでないか、リーダーの心の中が何に支配されるかが決め手です。人との関わりで正しい方向を示すのは大事ですが、押しつけは恐怖政治です。された信徒は御言葉と聖霊による成長でなく、エゴと束縛の奴隷になります。改めて招詞の意味を教えられます。絶えず主を見上げ、指導法 を謙遜に委ね、神からの愛から人への愛が生まれるように、委ねられた魂に献身しましょう

1 月 24 日

「栄光の冠」

I ペテロ 5:4

武安 宏樹 牧師

前回の2～3節で「Aではなく、むしろBで～」と3回繰り返されましたが、Aについて、表面的な損得勘定で奉仕しようとする自己中心を警告しました。Bについて、小羊キリストの押印をされた奉仕者による内なる霊の働きです。けれども、主の奉仕に具体的な目標を思ふことは、悪いことではありません。「大牧者の現れ給ふとき、萎(しぼ)まざる光榮の冠冕(かんむり)を受けん」(文語訳)ゆえんです。

とはいえ「冠」と言われても、マラソンや美人コンテストしか思い浮かばず、トヨタ車「CROWN＝王冠」「CORONA＝太陽冠」「COROLLA＝花冠」「CAMRY＝『冠』」、日産車「LAUREL＝月桂冠」。冠位十二階は徳・仁・礼・信・義・智をさらに二区分、官吏登用制に朝鮮の官位や中国の科举、わが国は勲章が閣議で選考されます。人間が選ぶと世俗的になり、叙勲に様々な利害関係も無縁ではありません。平和を訴える市井の人より、武器を売る要人が最高位をせしめる不条理です。

やがて月桂樹も枯れ、高級車も鉄屑に、叙勲受章者も死に、王朝も廃れる。されど一つだけ廃れない王朝が、新約聖書の冒頭に記されているではないか。むろん某共和国のことではなく、こちらも頭文字Cのつくあの大牧者のことで、「その國は終ることなかるべし」(ルカ 1:33)「我も亦(また)なんぢらに國を任ず」(ルカ 22:29) 世で荊(けい)冠(かん)、天で栄冠を受けし御子が、主を待ち望む誰にも賜る公平な冠です。十字架の隣の犯罪人(ルカ 23:42)、道交法違反者(私!)でも例外ではありません。

以上の「冠」は永遠のいのちの象徴ゆえ、聖徒全員に与えられるものですが、長老への「栄光の冠」には外面的な意味もあります。白い衣&金の冠を纏った、24人の長老たちが、自分の冠を御前に投げ出して礼拝したとあります(黙 4)。宇宙の全被造物と全信徒の代表が、御使いとともに礼拝する圧巻の光景です。彼らは立琴と、全聖徒の祈りの香の詰まった金の鉢を手し、賛美を捧げます。これぞ私たちの戴く冠。誰かと争い一等か二等か比べたり、功績者が美人か、そうではなく聖徒もれなく受け、そして御前に投げ出すことを喜びとする冠。その豊饒さに比べて、「強制～」「利得～」「支配～」に拘泥する奉仕の貧困です。私たちは如何に神に仕え、魂に仕えるか。栄光の冠に感謝したいと 思います。

1月31日

「へりくだり、ゆだねる①」

Ⅰ ペテロ 5:5

武安 宏樹 牧師

5節前半は教会内の人間関係から、後半は6～7節にかけてへりくだりの信徒全体への勧めへとテーマが拡大します。ペテロは主の弟子団において、謙遜と従順を訓練されました。これらが美德であることは疑いがないですが、それが人格的な資質としてどのように成長するかは、人間関係によります。彼は主ご自身から人格的指導を受けましたが、僅か3年間の弟子生活以上に、師の十字架を前に逃亡するという失態が、彼を砕かれた人格に変えました。「皆たがひに謙遜をまとへ」(文語訳)かつての彼に似つかわしくない言葉で、されど声高に勧めるのは、謙遜こそが弟子生活の基本という確信ゆえです。彼の霊的成長を見つつ、キリスト者は主の謙卑の御姿を最高の模範として、聖書から学ぶことができるのは何と幸いなことでしょうか。それだけでなく、聖霊が私たちの内奥から今日もキリストの姿に、聖化させてくださるのです。肉の願うことは御霊に逆らうも、謙遜&柔和は御霊で実を結びます(ガラ 5:). 自分では不可能でも、御霊の力は頑固な私たちの人格を変えるのに十分です。

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって～」(ピリ 2:)の、キリスト賛歌に同じ原語が使われています。私たちの肉は自己中心と虚栄に満ちています。神への奉仕なのに人に認められたい思い、競争心が蠢きます。若くて元気な青年が溢れる教会は活気がありますが、衝突が絶えず大変です。だからといってマニュアルで固めると、聖霊の自由と喜びが乏しくなります。「若い人たちよ。長老たちに従いなさい。」そこで熟練した長老連の出番です。彼らこそカウンセラーに相応しい。いや主イエスこそ Wonderful Counselor! 最近どうしたと声をかけ、聞くに堪えない仲間の悪口や宣教論にも傾聴し、ウンウンと否定も肯定もせず受け止めてあげると、若者の心が開かれます。すると信頼関係が構築され、徐々に教会の苦労話や信仰の失敗談も語れます。血気盛んな若者も自分の考えが絶対でないと気づき、他の意見に耳が開かれ、ひいては聖書の御言葉が素直に入り、聖霊の賜物が各人に分与されたと悟る。謙遜なんてと馬鹿にしていたのが、人に仕える素晴らしさに目が開かれます。長老の存在はどれほど貴重か。彼らの存在を通して若者はキリストを見ます。教会こそがキリストの愛と赦し、謙遜と従順を教えることができる場です。

2月7日

「へりくだり、ゆだねる②」

Ⅰ ペテロ 5:6-7

武安 宏樹 牧師

原文では6～7節で一つの文、文頭に動詞「へりくだりなさい」が強調され、「ゆだねなさい」は分詞として従属しており、二語は不可分の関係にあります。謙遜の実は人間関係の土壌で成長しますが、主体は自分でなく神の御手です。「へりくだりなさい」は受動態でもあり、命じられているのは私たちですが、御手なしにはへりくだり不可能です。御手と自分との関係についての理解が、時と場合で有無や強弱が変わると考えると、自分に引き寄せようと試みます。これでは建前は主権が神にあると認めつつ、御手を求める主体が自分なので、いつまで経っても平安を得られません。もちろん時に山籠りして祈りますが、答えとして何かを得るよりも、受け止め方が問題だと気付かされるものです。御手は私たちの上に断続的でなく、継続的にあると覚えなければなりません。すると私たちの意識は180度変わり、御手の下にへりくだることを志します。信仰生活の善し悪しや大罪を犯しても、逃げることのない御手が共にあれば、ジタバタしなくなる。試練が襲い理不尽な中傷を受けても、自分を責めたり、他人に帰したり、因果関係を逡巡せず、御手を信じて忍耐すればよいのです。

そういうわけで御前にへりくだる者の心には、自分でなく神が王座を占め、思い煩いいっさいをゆだねることができる。身の置き場がないと心配するも、神が心配くださるから大丈夫。「高くして」「心配して」くださる主体は神です。「高くしてくださる」のは、砕かれた彼方の「ちょうど良い時」を待ちますが、「心配してくださる」のは、渦中でも放っておかず変わることがありません。「ゆだねなさい」は、他の何かに決然と投げかけよという意味です(詩 55:22)。半分は自分で頑張り、半分は丸投げではなく、「いっさい」ゆだねることです。そうでないとせっかく心配くださる御手を、半分取り逃がすことになります。「思い煩い」の原語は、一事に集中しておらず、分裂した精神状態を指します。私たちは「ゆだねなさい」のチャレンジから、へりくだることを学ばされます。全部ゆだねる葛藤から、半分しかゆだねられず時間がかかるかも知れません。主イエスの謙卑は、イコール全存在をゆだねる歩みでした(ルカ 22:42/23:46)。御手を引き寄せる信仰では、へりくだることもゆだねることもできません。「幸福(さいわい)なるかな。心の貧しき者」(マタ 5:3)へりくだる者はゆだねる平安を得ます。

2月14日

「悪魔に立ち向かう①」

Ⅰペテロ 5:8

武安 宏樹 牧師

「へりくだれ」「身を慎め」「立ち向かえ」の命令形三部作は霊的戦いに際して、密接な関係です。謙遜の目的は個人に留まらず、悪魔との戦いにあります。

そもそも悪魔とは何者か聖書は多くを語らず、組織神学の扱いも僅少です。創造の御業の完成後、人の墮落までの間、神の使いが墮落して悪魔となった。以降今日に至るまで、創造主に反逆し、被造物が神の栄光を現わすのを妨げ、「世の神」として諸霊を支配下に、人を操り、社会を歪め、信徒を攻撃します。サウルを鼓舞、ダビデを誘惑、ヨブを攻撃、パロを頑迷に、イゼベルと蜜月、イスカリオテ・ユダやアナニヤ&サツピラには、「人殺し」(ヨハ 8:44)の本領発揮、初代教会には偽預言者&偽教師&偽兄弟。あの手この手で権威を及ぼします。我々は無関係とんでもない。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んで～不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいます。」(エペ 2:1-2)悪魔は信者・不信者の枠を超えて、歴史通じて世界全体で働いてきたのです。

パウロは武具の装着を(エペ 6:)、ペテロは心構えを説き、ともに大事です。「目をさまして」とは、あの居眠りの失態を指しているのでしょう(マタ 26:43)。再臨待望の心構えに頻出しますが、夜明け前ほど戦い激しい時はありません。当分来ないと安穩として情眠を貪ることほど、悪魔を狂喜させることはない。弛緩した礼拝生活や神を第一としない不従順のツケは、必ず回って来ます。以上は信徒全体への警告ですが、牧会を預かる長老&教職者は責任重大です。講壇から叫び、祈禱会で分かち合い、弱い者に寄り添い、御手に委ねて祈る。教職者の自己管理は当然ですが、不完全で罪や弱さも存在します(Ⅱコリ 12:)。結局は十字架の血こそ敵を撃退し、万軍の主の御名を叫ぶ以外に方法がない。そこまで へりくだって、初めて霊的な諸武具を取ることが許されるのです。

2月21日

「悪魔に立ち向かう②」

Ⅰ ペテロ 5:9

武安 宏樹 牧師

「彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました」(ヘブ 11:33-34)。今回は悪魔が何をしたか、今回は逆に悪魔に対して抵抗した勇士2名から学びましょう。

① 「モーセ対パロ～堅く信仰に立って」

「私はいったい何者なのでしょう?」(出 3:10)モーセの疑問に対する返答は、神の主権的な召しについてであり、彼の能力や事の無謀さは問題外でした。応召以降カウンセリングを受け、信用不安には杖、ロベタには兄が与えられ、10 災害と過越の儀式を通して、モーセと民は神のさばきと守りを体験します。パロは強敵ですが、モーセは霊的戦い以前にいかに主に従うかが重要でした。彼は救出者であり預言者で、何事も御言葉を求めて答え通り行っただけです。旧約最大の奇蹟である紅海渡渉も同様で(出 14:)、主の勝利は大前提でした。パロの気まぐれさえ、御手の中でした。私たちは戦いを恐れ気後れしますが、主に従えば大丈夫であり、霊的戦いは主に従う訓練の環境であるといえます。モーセ 120 歳辞世の句は信仰の極致です(申 31:6)。「堅く信仰に立って」こそ、霊的戦いの大前提であり目的地でした。臆病を信仰に変えた偉大な足跡です。

② 「ダビデ対ゴリヤテ～悪魔に立ち向かう」

ダビデは油注ぎ以降、神主導でありながら彼個人の勇ましさが目立ちます。ペリシテ兵の大巨人出現に王以下意気阻喪。彼は民族 & 国家存亡危機に際し、「この戦いは主の戦い」(Ⅰサム 17:47)と、霊的戦いの本質を見抜いていました。主なる神を愛するゆえに、御名を冒瀆する者に我慢ならなかった(出 20:7)。理解者が皆無でも、敵の恫喝にもひるまず、たった一つの石で敵を倒します。サウルへの忠誠、ヨナタンへの愛、神殿建築への熱心、息子達への偏愛など、主への熱心の背後と隙間で、幾度も失敗を経ながらも戦い抜いた人生でした。されど彼の熱心は高ぶりに進まず、「私は悩む者、貧しい者」(詩 40:)と吐露し、敵を撃ち落とす勇猛果敢も、主の前に何になろうという謙虚さがありました。「へりくだり」「身を慎み」「立ち向かえ」から、再び「へりくだり」へと循環する。勇士2名は形は異なれど、「堅く信仰に立って、悪魔に立ち向かう」者でした。

2月28日

「不動の者に」

I ペテロ 5:10-11

武安 宏樹 牧師

本書最終回、続く挨拶部分を除けば実質的に全体の締めくくりと言えます。ここまで語られてきた内容は、終わりの時代における霊的緊張感を伴う必要、苦難の中でもキリストを見上げて、牧会と謙遜と信仰とに励むことでした。以上は現在進行形の事柄で、「今」をどのように主に仕えるかが問題でしたが、その視点だけでは、霊的戦いの方法論だけでなく聖化論&人格論に至るまで、読者がペテロ御大直伝の信仰マニュアルと、勘違いする愚を犯しかねません。偉大な福音を人間的に改造する罪こそ、悪魔による最大の惑わしでしょう。原文では10節文頭に逆接が入り、「今」の流れから転換を暗示する重要な語で、それから福音に関して、私たちの持つべき視座と希望がどこか語られます。「恵み」とは、バベルの塔のように地上から届かない天に向かう階段ではなく、ヤコブが石を枕に夢見たように天から地上へと、御使いが昇降する梯子です。傍らで御使いが励ましを与えつつ、時来れば主イエスが迎えてくださいます。

私たちは「キリストにあって=in」「栄光の中に=into」入れられています。「永遠の栄光」「しばらくの苦しみ」が対照され、長く思える試練も束の間です。これでもかと駄目押しの如く「完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者と」は、いずれも願望より強い預言的確信をこめて、「～する」未来形が使用されます。「完全にし」人格&賜物の欠けや歪みも御手で整えられて(マコ 1:19/ I テサ 3:10)、「堅く立たせ」傷心のペテロが復活の主に見(まみ)え力づけられたように(ルカ 22:32)、「強くし」エマオ途上で心燃やされ(ルカ 24:)、五(ペン)旬(テコ)節(ステ)の聖霊降臨の如く(使 2:)、「不動の者」と=基を定め(文語)地中深く基を据える如く、動かぬ信仰者に。梯子(はしご)を上りきって100%似姿に変えられるのは、終わりの時にですが(栄化)、恵みは後払いではなく、ペテロは上記全てを前味として味わっていたのです。パウロは祝福の先取り可能を語ります(II コリ 3:18)。努力で到達不能な恵みが、マニュアルではなくナイアガラのように注がれます。それは戦闘中の悪魔も、罪深い肉の性質も、世の流れさえも、絶対に押しとどめられないものです。11節は頌栄です。本書は「神」「あなた方」の個人的関係の勧めが大部分ですが、最後に人間の存在以前に、無限&不変&独立自存なる神に目を上げさせます。主イエスが凱旋された王座から、「支配」「権力(ちから)」「(文語)が私たちに及ぶのです。

3月6日

「どちらが神か①」

I 列王記 18:1-24

武安 宏樹 牧師

ソロモン死後、南北に分裂した王国ですが、北の方がより墮落が甚だしく、ヤロブアム以降アハブに至るまで、揃って主の目に悪を行う王ばかりでした。元を辿れば、ソロモン神殿奉献以前から、「高き所」(3:3)を用いての礼拝は、違法性はなくとも異教的祭儀と判別しにくく、紙一重の霊的妥協が膨らんで、代替りのたび偶像礼拝が浸透し、アハブは妻の影響もあり公然と行いました。だから後に南王国でヒゼキヤやヨシヤが率先して行った、宗教改革の端緒は、高き所の破壊で(Ⅱ歴 31,34:)、モーセ作の青銅の蛇さえ容赦しませんでした。

早魃は北王国の霊的&物質的偶像礼拝への挑戦でしたが(17:1)、アハブは悔い改めるどころか、部下オバデヤと国中を二分して水場を探す有様でした。空しい仕事でしたが、道中オバデヤは預言者エリヤなる霊的泉と遭遇します。彼の祈りと献身が、国中を二分する霊的戦いに、エリヤを呼び出したのです。預言者を前に王は「これはおまえか。イスラエルを煩わすもの」と罵倒するも、妻の偶像礼拝と預言者殺しの愚行を黙認し、目先の利益で周辺国に迎合し、うまくいかないことは他人のせいに。イスラエルの名も地に堕ちたものです。

「あなたとあなたの父の家こそそうです。」エリヤは真っ向から反論します。これはイスラエルの名をめぐる、神に属する者と悪魔に属する者の戦いです。バアルにつくのは契約の神への背信行為であり、第1〜3戒の自殺行為です。ソロモン以降の霊的妥協が祟り、偶像礼拝で沈没寸前の王国に火を投げ込む。アハブ的には罪意識すらなく、形式的信仰と他の神々を両立させていました。「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか」(21節)と迫る、エリヤが相対するのは主と偶像に二股かける、王だけでなく全国民であり、契約の民の自覚が欠如したまま適宜偶像を利用する、霊的御都合主義でした。

私たちはどうでしょうか。さすがに他の神々にひれ伏すことはなくても、御言葉の聖霊の導きに専念せず、適当な折り合いをつけていないでしょうか。悪魔は契約を無効にできない代わりに、形式的でなまぬい信仰へ誘います。どちらが神か。それは目に見えない領域、御名をめぐる信仰告白の戦いです。

3月13日

「どちらが神か②」

I 列王記 18：25－46

武安 宏樹 牧師

「あなたがたは自分たちの神を呼べ。私は主の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神」(24 節)と、エリヤは世全体に啖呵(たんか)を切りました。群集心理の中で、皆が一つになって騒いで踊れば何かが変わるのではという、根拠のない希望的観測が支配し、世と罪と悪魔が渾然一体と化していました。しかしエリヤにとって大事だったのは、力比べで己の力を誇るのではなく、「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。」の御言葉でした。雨を降らせる結果は確定も、悔い改めを経ないで奇蹟では御名が汚されます。だからあくまで手段として力比べせざるを得ない。その他大勢を敵に回して、されど冷静沈着にルール説明＆先攻後攻決め、彼が試合の主 導権を握ります。

対するアハブ陣営は数に恃(たの)んで盤石の態勢で、優位性を発揮できたのか？実はリトマス試験紙を通されることを、彼らは最も恐れていたのではないか。バアルやアシェラに帰依した積極的信仰など乏しく、主から離れた罪悪感と、代替手段として他国から伝わった神々を、適宜利用したに過ぎないからです。エリヤはそんな彼らの信仰の空虚さを見抜いて、言いたい放題挑発しました。余計に意地になって、身を傷つけて、狂ったように叫び踊りまくる滑稽さで、あえてそうさせて消耗させることで、彼らの信仰を破綻させる必要があった。いくら警告しても耳を貸さぬ者には、その愚かさを悟らせるしかないのです。果して何の応答もない空しさを痛感し、エリヤは悔い改めの招きを します。

「私のそばに近寄りなさい」疲労困憊(こんぱい)した彼らへの応答は偶像からでなく、主からでした(マタ 11:28)。祭壇の再建は、ひび割れた彼らの信仰回復でした。ここに愛があります。同所サマリヤの女が主イエスと邂逅(かいこう)の瞬間です(ヨハ 4:)。祭壇を水に浸したエリヤの祈りは、「あなた＆私」の個人的真実の祈りでした。天から火は下り、決着がつき、「主こそ神」と民の悔いの感情が爆発しました。これは水のバプテスマでは足りない、火による聖霊のバプテスマを思います。エリヤの信仰、悔いた民の希望、それ以上に神の愛を思います(I コリ 13:13)。前途は暗くも、彼の祈りは十字架を前に主のゲツセマネの祈りを展望します。この祈りも愛で結びます(ヨハ 17:)。戦うエリヤの 心に愛と平安がありました。

3月20日

「苦悩の中から」

ヨブ記 7：1-21

武安 宏樹 牧師

本書は序盤(1-2章)と終盤(38-42章)の間に、中盤(3-37章)の冗長と思える、ヨブと友人たちとの問答が展開されます。三友人は役立たずに見えますが、遠方から来て、無言で七日七夜寄り添い、号泣し自らちりをかぶった点で、評価されるべきですが、義人の苦難という不条理を理解できませんでした。彼らの論調が次第に鈍くなる一方、ヨブの方は反比例して雄弁さを増します。伝道者の書が諦観に似た一歩引いた視点に対し、本書はより主観的で人間の煩悩との生々しい戦いで、心病む人&孤独な人&不器用な人に特に薦めます。

6章は友人への答弁、7章は～6節が自分への嘆き、7節～は神への訴え。他人に訴えても駄目で、自分の世界で八方塞がり。されど天の窓を希求する。「苦役」は戦争用語で兵役の意です。そもそも労働は社会命令の一環として、喜びが伴うものですが墮落の結果(創 3:17)、神の栄光を現わすためではなく、自分の栄光のための労苦へ歪められました。逆にヨブは神を恐れ人を愛する、エデンの園の如き交わりを保ち、絶えず祝福を信じ受けていました(申 5:10)。それが突然、被災者の社会的基盤以上の、宗教的&自己同一性基盤の崩壊を経験します。神に背を向けた心当たりがないため、悔い改めの材料もない。そんな彼に人生自体が強制労働、流れる時間が苦痛、夜も眠ることができず、「私の肉はうじと 土くれをまとい、私の皮は固まっては、またくずれ」しました。

人に受け止められず、自分で受け止めきれず、行き場の無い思いの丈を、神にぶちまけます。「息」の原語は、「風」(伝 1:14)と同じく空しさの象徴です。されど「息よ四方から吹いて来い」(エゼ 37:)と、回復の預言にも用いられます。神の息が人に入ると、無目的な人生から神の中に生きる人生の宗教的恵みを見出します。「ただの息」とは人の呼吸と神の息とが分離した空しい人生です。ヨブの口は神の前に過ぎているでしょうか。たしかに激しすぎる言葉ですが、「霊の苦しみ」「たましいの苦悩」からの肉薄は、問うか死ぬか択一の激情です。主イエスは「門を叩け、さらば開かれん。」(マタ 7:7)とヨブを敢えて招きました。陰(よ)府(み)の世界まで降下し「わが神、わが神、どうしてお見捨てに〜」(マタ 27:46)と、御子だけがこの苦しみを理解し、ヨブはこの究極の交わりを受けていました。粗野&率直な祈りが血となり肉となる。苦難からキリストを体験しましょう。

3月27日

「死の力からの解放」

黙示録 21：1－4

武安 宏樹 牧師

「新しい天と新しい地」から、聖書全体を眺めます。日本で「新地」といえば、「北新地」(大阪市)、「二子新地」(川崎市)など、むしろ古い街が多いですが、「新天新地」は違いました。時間の経過で古びず、質的に一線画して新しい、原語「カイノス」が使われます。対する「ネオス」は時間的に新しいとの意です。聖書の最初の書である創世記と、最後の書である本書を比べると興味深い。天地創造によるエデンの園からは、アダムが追い出されていまいましたが、新天新地に於てエデンの園以上の、素晴らしい世界が信者に用意されています。エバが取って禁じられたいのちの木は、12 種の実が毎月民を潤します(22:2)。人間中心社会の象徴であるバベルの塔は、大バビロン滅亡で終焉を迎えます。御言葉に加除を試みる惑わしの霊に対しては、災害を加え、恵みを除きます。私たちは自分の罪深さや世の中の暗さを思って、しばしば嘆息する者ですが、旧約時代の予型的救いと違い、私たちはキリストの確かな救いを頂きました。死の力&罪の力に打ち勝った新しいいのちです。「彼らの額には神の名が」は、聖霊の証印と共に、公同教会が新天新地の前味を味わう属領との意味です。

「新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ〜」(コロ3:10)ここで原語「新しい」は上記二つを使用します。罪人→神の子と「新しく」され、それ以降は毎日新しい恵みで、昨日の恵みが過去になるほど、刷新されます。信じて受洗してオシマイではなく、一生聖化の恵みに与って成長するのです。主は共に歩まれる。それは自分の努力でなく、主の復活で可能になりました。当教会で受洗&転入する方が増えて感謝と共に、備えの 때가祝されています。教える者が力不足、教わる者が手探りでも、聖霊が双方を成長に導かれます。加えて古い信徒の霊性が健全ゆえに、教会内で恵みが同心円状に広がります。何もない者ですが、キリストの復活の事実&聖霊の恵み&神の新天新地への方向性に信頼する私たちは全てを持つ民でもあります。現在婚約中の教会は、天に挙げられる結婚式を待望します。主は私たちの間に幕屋を張られます。暫しエデンから追われた民でしたが、「インマヌエル〜主は共に居られると、新約第一の書マタイ福音書に掲げた理想は、最終の書ヨハネ黙示録にて完成」(小畑進師)します。引き裂かれた関係は回復、いや完成へと聖霊が導きます

4月3日

「主イエスを知ることによって」

Ⅱ ペテロ 1:1-2

武安 宏樹 牧師

①「しもべ&使徒、シモン&ペテロ」(1節)

第一書簡は世の迫害という対外的必要ですが、本書は対内的必要が目的で、かつて同じ釜の飯を食べていた仲間に、「使徒ペテロだ！」と命令口調でなく、「しもべ」＝全信徒に共通、「シモン」＝漁師時代を想起する人間臭さに訴えて、同じ目線で関わるのが、道を踏み外した者への基本姿勢だということです。最後の晩餐のみ呼称が「シモン」に変わるの、誰が偉いか愚論に明け暮れる弟子たちの中でペテロが、主から出生名で呼ばれることで後の十字架を前に躓く自分の弱さを覚えさせるためでした。そして同じように躓く者に対して、「兄弟たちを力づけてやりなさい」と憐れみを期待されました(ルカ 22:31-32)。彼らは既存の教会を批判する一方で、誰にも心を開けない問題が必ずあって、自分の弱さが明るみに出ることを恐れます。ゆえに不都合な部分を削除した、「新しい教え」を喧伝しますが、結局は自分を守る教えなので、偶像礼拝です。「十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心した」(Ⅰコリ 2:2)とパウロは言いました。異端とは知識戦ではなく、十字架理解に尽きるのです。

②「知識から恵みへ」(2節)

「エピ～方向性」+「グノーシス～知識」＝「知ること～深く進んだ知識」の意。彼らがキリストを否定し十字架を後にする、空虚な「新しい教え」を皮肉って、我らは知識は知識でも、「恵みに成長する生きた知識」とであると強調しました。神学や方法論や神秘的体験など新奇な教えも結構ですが、ひけらかす人々の心の深い部分は平安で満たされておらず、内外のギャップが激しいものです。熱情家のペテロは知識が不要とは言いませんが、謙遜と共に「深化」している。彼らには知識や肩書の数より、キリストの内住の豊かさを証ししたいのです。冒頭で名前を併記したのは、昔と今の、同一性と特別な職務のギャップから、知識が深く広がりをもって増し加わる豊かな世界を、示したかったのです。感わしになびく人々が本当に求めているのは、知識でなく愛です(Ⅰヨハ 4:18)。一時は熱心に奉仕したのに、どこかで傷ついて霊的にひねくれてしまった。知識は言葉では伝えきれませんが、一言一言の重みをもって伝えられます。論争も時に必要ですが、私たちの姿から主の憐れみが証しされたら最高です。

4月10日

「栄光と徳」

Ⅱ ペテロ 1:3-4

武安 宏樹 牧師

「選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民」(Ⅰペテ 2:9)とされたキリスト者は、この身分に神の「栄光と徳」によって召された者です。西洋では思慮・正義・忍耐・節制を四元徳に掲げますが、神は全てを備えます。文科省HPには、教育の目標＝知と徳と体の調和のとれた発達と記載します。その道徳教育は、人の尊厳よりも国の尊厳のために人格を整える方向性から、自己を批判する視点が乏しくなります。自分が何者で、何のため生きるのか。道徳教育には宗教的要素が不可分ですが、聖書は明確な答えを与えています。私たちは主なる神に造られて、罪からの救いと御国の建て上げに召されて、神の栄光を現すために生きる者です。本文は「徳によって」の他に「徳へと」も訳せます。すると聖霊の力で主の似姿へ人格形成される豊かさが加わります。とはいえ神になるのではなく、主イエスの練られた品性に変えられるのです。

神の栄光と徳「によって」召され、神の栄光と徳「へと」召されることには、過去→現在→未来にわたる聖化があり、聖化は神との交わりによる感化です。「栄光化」「徳化」です。交わりを後にした者たちは、そうなりたくて仕方ない。ペテロは「エピグノーシス～深く進む知識」と、ただの「知識」の相違について、過去時制で「滅びを免れ」「神のご性質にあずかる者となる」ことを記します。彼らは上記二つを得る「ために」どうすべきか、不信仰ゆえの不毛な研究に、明け暮れています。十字架の贖いで解決済の事柄を蒸し返してどうするのか。さも新たな知識だと吹聴する愚の骨頂は、裏を返せば栄光と徳の交わりへの無知を認めたということです。「すばらしい約束」とは召しと選びを確信して、現在進行形で恵みを与えられている人生、まさに「深く進む知識」なのでした。

「深く進む知識」とは交わりを後にする者が蔑んで、異教社会が盲目である、聖書に記されたと真ん中の恵みです。その記述をアピールするのが聖霊です。聖霊の栄光や徳は、私たちの日常生活の生き様を通して臨在に現されます。点から線へ線から面へ、「信仰・希望・愛」の徳性が相対的正義の地で輝きます。十戒・山上の垂訓・主の祈り他、変わる事のない絶対的正義を持つ私たちは、時に困難に遭遇し、砕かれ、謙遜にされながら、栄光と徳が強く現されます。

4月17日

「信仰の梯子」

Ⅱ ペテロ 1:5-7

武安 宏樹 牧師

本書は「知識」が主題ですが、いきなり三段目に足をかければ怪我をします。御手による人格形成は、青二才の知識が独り歩きせぬよう緻密な重層造です。「逆さ富士」は湖面に富士山が下向きに映りますが、上に昇り王なるキリスト、下に降り下僕なるキリスト、つまり一段一段昇りつつ降る二重性を思います。「あらゆる努力を」とあるように、この梯子は全ての信徒に用意されています。

①「信仰」

全ての出発点であり、八段目まで支える土台なので重要です。信仰義認は最重要の教理です(ロマ 3:/創 15:)。とはいえ信仰があれば何でもアリではない。キリストに根を張りながら、芽を出さぬ信仰は、地盤(心)に問題があります。

②「徳」

人格的優秀性であり、単に教養とか心の広さではなく実際の有用性です。よって信仰は内に籠る神秘的生活ではなく、神と隣人を愛し仕えることです。

③「知識」

以上に加えて、霊的成長や人間関係や組織運営に实际的な知識が必要です。徳に支えられる知識の構造は重要です。異端は知識のみを欲しがるからです。

④「自制」

自己を把握する能力(セルフコントロール)です。人は知識を得るとすぐに、知者ぶります。評価されると鼻高々、シンパを集めて、気がつけば偽教師に。そうでなくとも頑張りすぎて心身に異常を来すのは、聖霊に先んじた罰です。

⑤「忍耐」

静かに耐え忍ぶよりも、困難でも前向きに労苦する勇気の意で(ヘブ 12:2)、「練られた品性」(ロマ 5:4)を生み、ポジティブな忍耐を知る人は味があります。

⑥「敬虔」

主イエスに完全に見られる、神と人に対して聖と愛を求める正しい関係で、力強いものです。敬虔主義は信仰→敬虔まで過程を飛ばす傾向がありますが、必ずしも順番でなくとも、後戻りして間をおさらいする成長も必要でしょう。

⑦「兄弟愛」⑧「神の愛」

敬虔に二つの愛が乗ることで、人格・知識・自制・忍耐の再点検を要します。でないと自分本位の兄弟愛&神の愛となり、弟子たちの出世競争となります。頂上に神の愛が置かれたのは、以下全てを貫き包括するからです(Ⅰコリ 13:)

4月24日

「一タラントも主からの尊いものです」

マタイ 25:14-30

鄭 南哲 師

今日の聖書本文であるマタイの25章のタラントの例え話はみなさんもよく聞いた事があるご存知の内容ですが、実は我々が知っている程度よりも深く大切な内容が書かれています。主人の家で同じ3人のしもべの中どうして二人のしもべだけが後で“よくやった！善い忠実なしもべだ！”とみとめられ、誉められ、一人のしもべは主人に厳しく怒られたのでしょうか。みなさんはいつか主の御前に立ってられ清算される時にほめられるしもべになると思いますが、それとも厳しく叱られるしもべ側になると思いますが、どちらに主人から評価されるのでしょうか。その理由は何だと思いますか。今日我々が少なくとも怒られない主のしもべとなるためにはどうすればいいのでしょうか。主の御言葉によって一緒に探り、考えて見ましょう。

1. 預かる信仰(14, 16, 17, 18, 20, 22, 24, 27節)

“天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。”(14節) 主人からすべてのものを預けられているという確実な信仰が必要です。実は我々が持っている全ては自分の所有ではなく、主人が一時的に我々に相応しく預けたものであり、我々はそれを主人の御心通り管理する者であるという事を確かめ、握り、実践して行く信仰が必要です。

いったいどうしてこの1タラントを預かったしもべだけが怒られたのでしょうか。

2. 今日が主からの最後の日のような信仰(19節)

主人が出かけてからかなり時間が経ったということです。帰って来ると約束したのにもかかわらず、しばらく時間が経っても主人はなかなか戻って来ません。5、2タラント預かったしもべたちがすぐ行って働きましたが、この1タラント預かったしもべはもう主人が未だにも来ていないのであれば、もう来ないのではないかと考え込んでしまったかも知れません。ここまで考えてしまってから、彼は自分に預けられたものにはあまり関心がなくなり、後回しになります。自分にはまだまだ時間と機会が十分あるだろうと思い込んでいたかも知れません。

3. 'ひどい方'の意味？(24節)(= 比較しない信仰)

1タラントの価値は今日でいくぐらいでしょうか。(参考: 1タラント: 6000 デナリ, 1500 シェケル) 一タラントでもどれほど感謝すべき物であるでしょうか。我々はみな少なくとも一タラント以上主から預かっている者であります。

4. 神様の評価基準(21,23節)

神様は人々の思っている大きい、小さいことの基準とは違う観点でみられる方です。イエス様は 5 タラント, 2 タラントを預かった人を誉めながら'良い忠実なしもべ'だと言われましたが、ここで '忠実'という言葉はギリシャ語で'ピストス'という形容詞が遣われています。この忠実は意味は変わらないことです。

＜まとめ＞

主の前でいつも忠実なしもべとしての今自分に与えられた一タラントでも主からの尊いものとして感謝しつつ、主のために使いましょう。いつかは神様の御前に立って自分の人生にたいして清算する日がかならず来るでしょう。その最後の瞬間、私たちの創造主であり、裁き主である主が私たちにむかって“よくやった良い忠実な私のしもべよ！あなたはわずかなものに忠実だった！これから私とともに永遠にしよう！”という賞賛ばかりを受ける愛宕山教会の全信仰の家族となりますように救い主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！

5月1日

「霊の目」

Ⅱ ペテロ 1:8-9

武安 宏樹 牧師

前回は「信仰の梯子」から聖霊が私たちを、主の似姿に造り変えられる恵み、そして「これらが～豊かになるなら～実を結ばない者になるとはありません。」― 見地味でも、「主イエス・キリストを知る」信仰者は少なからず存在します。どれだけ教会の役に立ち、実績を挙げたか、知識と行いを誇る偽者に対して、霊的 人格を備えた者は重要です。両者の相違点は目が何を見ているかです。「近視眼」はここだけ。「盲人」は聖書に頻出します(マタ 10:27-30/マコ 10:46-52)。

「わが目を開きてさやに見せ給え 今まで知らざりし聖書(みふみ)の真実(まこと)を」(新聖歌) 聖書は肉眼で見える世界が全てではなく、目に見えない霊の世界を語ります。最初の人の目の開かれ方は神に対してではなく、見える世界に対してでした。かく て第一に創造主、第二に被造物を見る順序が転倒し、人間中心の秩序に。神は世を愛されますが(ヨハ 3:16)、神なしに悪魔と人と被造物が一体となった、世界秩序を憎まれます。罪の刈り取り責任を取られるのは人です(ロマ 6:23)。私たちが盲目なのは、目におおいが掛けられ、神の世界が見えないからです。私たちが近眼なのは、表層的な世界で完結し、天に焦点が合わないからです。

「これらを備えていない者」とは誰を指すのか。梯子の頂点は神の愛です。兄弟愛までは聖霊の働きの内に、人間の努力 で積み上げることも可能ですが、そこで終わっては、未だ超自然的な神の愛に目が開かれぬ未到達者なのです。復活の主に三度尋ねられたペテロは、最善の兄弟 愛で愛しますと応答します。主イエスはそれを受け止めつつも、自分の情熱・能力・努力の限界を語ります。「それでもわたしを愛しますか。」そんな重い問い かけをペテロは受けました。この時点で未だ閉じていた霊の目は、聖霊降臨で神の愛が注がれることで、焦点がピタリと合って、以下7段分を貫く究極的な意味 を悟らされたのです。

主 イエスは生まれつきの盲人に、唾で泥を塗って池で洗わせて癒しました。弟子たちもパリサイ人も、盲目は彼が両親の罪ゆえと因果関係の奴隷でした。一線を引 く高慢が目をおおい、愛のない偽りの世界秩序が支配していました。しかし主イエスは追放された彼を探しだし、彼は8段目の愛がわかりました。私たちの霊の 目は開いていますか。「深く進む知識」は愛の奥義に進ませます。

5月8日

「つまづかない」

Ⅱ ペテロ 1：10－11

武安 宏樹 牧師

「つまづくことなど決してありません」とペテロは二重否定で断言します。それは使徒たちが異口同音に、聖書信仰&復活信仰に立てばそれで十分だと、教え 込むことへの不足&不安&不信の感情に、異端が巧言で惑わすからです。つまずきの元祖はアダム&エバですが、私たちもその経験がない訳ではなく、いやされ ぬ心、救われぬ家族、打開されぬ試練に、苛立ちを覚えるものです。

「召し」と「選び」は似ていますが、神の選びから地上での召しが生まれます。ドルト信仰基準は選ばれた者として喜びと責任が「キリストを信ずる信仰」「神の子らしき畏れ」「罪に対する敬虔な悲しみ」「義への渴望」に現れるとし、その自覚こそが自分の怠惰を顧みて、悔い改めと飢え渴きを起こすとしします。もし私たちに御霊の実が乏しければ、行いでなく選ばれた自覚を再点検する。常に自分が何者かに立ち返り感謝していれば、信仰の足腰が磐石になります。新奇 な教えに即飛びつく者は、敵の縦横の変化や奇襲で容易につまづきます。

「選び」と「召し」をどのように確かめたらよいのか。新しい知識と嘯く者は、人間的に把握しやすく、名誉や権限が向上 するマニュアルを持っています。されど目に見える指導より、霊的&人格的取り扱いの方がはるかに大事です。そして私たちもマニュアルがない訳ではなく、八 段からなる梯子を有します。この梯子を軽い足取りではなく、選びと召しに根差して一段一段踏みしめる。ユニークなのは、ただ昇るだけでなく、昇りながら振り返し、戻ってみたり、最上段から各階を吟味したり、昇っているようで降ったり、全身運動となる。

「確かなものとするように、いっそう努めなさい」(新共同訳)中態動詞から、一方的に頑張るのでなく、主の恵みと自分との共同作業の意味が出てきます。信仰の梯子を一步一步踏みしめる彼方には、御国に入る確信が加えられます。「永遠の御国」とは、ペテロのやがて彼を死に追いや るローマへの対抗意識か。この梯子の頂点とは逆さ十字架に至る、まさに主の命がけの愛なのでしょう。ここに御国ありと悪魔に誇示する。この生き様につまづ きは毫(ごう)もありません。私たちはこの時代に神に選ばれ、地上の召しを受けたことを感謝しましょう。

5 月 15 日

「大宣教命令とペンテコステ」

マタイ 28 : 18-21 使徒 2 : 1-4

村松 勝三 師

私は 1970～1984 年の 14 年間奉仕させていただきました。若いゆえの失敗も多かったと思いますが、皆さん本当に忍耐深く一緒に働いてくださいました。ともかく一生懸命に働いただけに、愛宕山時代の思い出はぬぐいきれません。最初は便所作りでした。丘の上の小さな、いかにも教会らしい建物でしたが、トイレがなかったのです。西側の崖下に掘立小屋のようなものが立てられ、用を足すとお釣が降りかかる代物で、便所がないのが不思議に思いました。40 年前 スウェーデンの支援教会を巡りました。ほとんど田舎の教会でしたが、トイレが離れた所にありました。所謂ピューリタンの信仰を持った、敬虔な人々だったのです。こうした信仰者によって愛宕山教会も建て上げられたと知ったとき、こうした純粋な信仰を持った教会とならねばと思ったものです。

さて本日は、ペンテコステで、聖霊が下って教会が誕生した日であります。主イエスキリストが復活・昇天し、50 日目に約束通り聖霊が下ったのでした。甦られたイエスは弟子たちの前に何度か現れ、甦りの事実を示されたのです。生前の姿とは変わりました。弟子たちが気付かないのに部屋に入ってきたり、イエスがガリラヤ湖畔に現れたとき、ペテロはそれに気が付きませんでした。裸と分かって着物を急いで着て、わざわざ海に飛び込んだこともありました。

さて甦った主は 40 日目にオリーブ山で、500 人以上の眼前で天に昇られた。昇天されたから、今は甦りの主に出会うことはありません。主は弟子たちに驚くべき大宣教命令を宣言されました(マタ 28:)。この命令の驚くべきことは、2000 年前の古代でありながら、◎偏狭な民族主義でない、◎人種差別がない、◎男女差別がない。ユダヤ教はじめ全宗教も古代の歴史文化に拘束されるも、イエスキリストの教えは、時代を超えておりました。やはり神の言葉でした。最後に「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」を証明するのがペンテコステ、主は聖霊 となっていていつも共におられるのです。僧侶曰く、三位一体の教理は誰が考え出したのか、本当によくできていると。仏教徒は人間の悟りや哲学が全てなので、三位一体などは及びもつきません。復活 → 昇天 → 聖霊降臨の筋書きも、神の啓示によるとしか考えられません！主の生涯・十字架・復活・昇天・聖霊降臨は、啓示の具現・神の言葉・約束です。私たち は主といつも一緒にいることができる。なんと素晴らしい！アーメン

5月22日

「リマインド」

Ⅱ ペテロ 1：12－15

武安 宏樹 牧師

「リマインド」は和製英語にもなっていますが、携帯電話やメールの機能等、設定した物事を忘れないようにさせる意で、ペテロは恵みの出来事や真理を消極的に忘れないだけでなく、積極的に3回繰り返して思い起こさせます。

本日の箇所で「リマインド」の他に、もう一つのキーワードは「幕屋」です。両語をつなげば、「死が近いから、思い起こさせたい」ということになります。もちろん彼の生涯ではなく、キリストの恵みについてです。幕屋＝テント。出エジプト記は、奴隷からの脱出&律法の賦与&幕屋の設営を記す書ですが、「去る」の原語は当書を表す「エクソダス」なので、ペテロは死を意識しながら、罪の奴隷&律法の束縛&幕屋なる肉体から解放される、聖化を思い起こして、キリストの復活の肉体、完全な似姿とされる希望を見上げます(Ⅱコリ 5:1-4)。

地上での肉体も生命も世界も、幕屋のように折り畳み式で仮の姿にすぎず、神の選びと地上の召しに従い生きつつも、天の故郷を覚えよということです。ペテロは主イエスに伴われ変貌山にて、とてつもない幻を目の当たりにして、頭の中まで真っ白になって、「幕屋を3つ」など珍回答をしますが(マコ 9:2-8)、逆に考えれば、主イエスは彼に真の幕屋を見せたかったのだと思わされます。地上の幕屋＝教会は様々な問題があり、「あなただけは神の神殿」(Ⅰコリ 3:16)とある如く信者各人も同様ですが、共に聖霊の宮、神と人の出会う幕屋です。彼が生んだのは幕屋3つどころか、通り良き管として数千の魂の救いでした。真の幕屋は人間的枠組みで収めきれない、天と地の結び合う場にありました。

殉教者ステパノも「天はわたしの王座、地はわたしの足台」(イザ 66:1)預言を引用しながら、霊の目開かれ、石で打たれて当然の大胆な説教を語りました。かくて「一粒の麦地に落ちて」(ヨハ 12:24)、目撃者サウロが使徒パウロとなる。ステパノこそ信仰の梯子の頂上八段目に足をかけ、神の愛を見た者でした。「リマインド」とは、以上でペテロ&ステパノがはっきり見て、私たちもまた垣間見せられる素晴らしい世界を思い起こすことです。主の恵みを思い起こし、聖霊に奮い立たされ、私たちに与えられた希望を思うことは勝利の秘訣です。

5月29日

「人間をとる漁師にしてあげよう」

マタイ 4 : 18-22

山本 博愛 師

① 主イエスは、あなたのこの世での働き方をご覧になる(18節)

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と、宣教開始の宣言をされた主イエスは、御自身の弟子となる者達を召して行かれます。主イエスがガリラヤ湖畔を歩いておられた時、漁をしていたペテロとアンデレの兄弟をご覧になります。汗と泥で水浸しになりながら、一生懸命に漁をする彼らの姿を、主イエスは見て おられました。同じように、私たちのこの世での日常の生き方、働き方を、主イエスは天からご覧になっておられます。そのことを覚え、罪の世にあるとはい え、主にあって誠実に生きて行ける事を感謝していきたいものです。

② 主イエスは、あなたを新しい使命に呼びかけておられる(19～22節)

主イエスが、ペテロとアンデレに言われた「わたしについて来なさい」とは「わたしの後に従いなさい」ということです。このように主イエスの呼びかけによって、彼らが弟子とされ、「人間をとる漁師にしてあげよう」と、新たな使命が託される事になったわけです。

次にゼベダイの子ヤコブとヨハネも、仕事の後片付けをしている所を、主イエスをご覧になり、彼らと呼ばれていきます。主に用いられる人というのは、網を繕う彼らのように、この世での働きを誠実に行う人です。主はこのように、いつでも準備している者を見ておられるということです。愛する兄弟姉妹の皆様。私たちキリスト者の主要な務めの一つは、人々に福音を伝える事です。そしてこれは、この漁師たちのように、この世での誠実な働きの中でこそ、主から召され、託されて行くものなのです。

6月5日

「威光の目撃者」

Ⅱ ペテロ 1:16-18

武安 宏樹 牧師

ペテロが主イエスに連れられて、変貌山で見せられた幻について続編です。珍回答「幕屋三つ」どころか、聖霊は彼を用いて世界中に教会を増やしました。「年寄りは夢を見、若い男は幻を見る」(ヨエ 2:28)とあるように、聖霊が降ると、幻が現実となります。知識だけ誇る異端は、体全体で信仰を受け止めません。教師は必ずしも神を知らず、下女は捧げる祝福を味わっていました(マコ 12:).

一人称が複数「私たち」に変わります。ペテロはこれまで自分の目で見て、信じて、従ってきたことを、健全な福音的神学として証してきましたが、変貌山は三名の証人がいる訳で、一人より三人の方が権威づけになります。ヨハネも書簡の冒頭で、ペテロと異口同音に体感的な信仰を証しています。「私たち」は狭義では弟子たちですが、広義では直接主を目で見た訳ではないパウロ・ステパノ・アウグスティヌス・ルター・ウェスレーをはじめ諸聖徒が、聖霊 & 新生体験を経た者として、継続し跡を絶たないのがキリスト信仰です。「私たちはみな、そのことの証人です」(使 2:32)同じ御霊を戴く私たちもです。

ペテロは自分たちが見て聞いたことを強調しますが、誇ってはいません。後にカトリック教会が定める彼の首位性など、想定外で求めてもいません。第一義的に復活や再臨を否定する新しい知識の者を、攻撃していません。「私たち」と「あなたがた」の間に、異端が線引きしたがる一線を引くのではなく、いかに主の復活が真実なのか、兄弟愛と神の愛から仕えようとしています。パウロは奇蹟ではなく自分の弱さを誇り、彼の上に主の真実が浮かび上がることを願っています。「自分は弱くてもあなたがたが強ければ〜」(Ⅱコリ 13:9)

私たちは大宣教命令に従い、聖霊の力により地の果てまで宣教する者です。その拡がりを妨げる惑わしの霊によって、弱い人や教会の攪乱もありますが、私たちはキリストの威光の目撃者として、何をどのように誇るかが重要です。自分の知識や体験から信仰を誇るのではなく、欠けだらけの私たちを通して、主がどれほど素晴らしいことをしてされたか、余すところなく証しましょう。その証しに御名をほめたたえる目的が明確なら、聖霊は広範に働かれます。

6月12日

「確かな預言のみことば」

Ⅱ ペテロ 1：19－21

武安 宏樹 牧師

主の真実は体験だけでなく聖書の御言葉で知られ、生きて働くものです。本日の箇所は聖書と聖霊の関係について、宗教改革者により頻出されます。聖書は啓示の書です。天地創造や墮落など昔のこと、バビロン捕囚やメシヤ預言や世の終わりなど未来に起こることを、神は知らせたいと思われました。「初めに神が〜」(創 1:1)と始まるように、聖書は神の存在を前提としており、有無を論証しないため、処女降誕や復活など古今東西各方面から攻撃を受け、あるいは学者から検証や解釈により、神学が多岐に亘る要因となっています。にもかかわらず、未だに聖書が世界のベストセラーなのは驚くべきことです。専門家だけでなく子どもでもわかる、人の生きるべき究極的真理があります。神のことばを多くの著者が会合無しに、一貫した主題がある不思議な書です。

まず聖書が神のことばと受け入れたら、第二にどのように解釈するかです。聖なる神のことばを人間が解釈せざるを得ないため、歴史的に論争が絶えず、そういった学問に精通する聖職者層に、聖書解釈の権威が独占されてしまい、聖書から逸脱した規則で彼らのやりたい放題、政治にも介入する有様でした。そのような絶対的宗教的権威であった、カトリック教会に反旗を翻したのが、M・ルターで、教皇の権威を否定し、「我ここに立つ」と聖書信仰を掲げます。宗教改革の波は燎原の火の如く拡大し、プロテスタントが枝分かれしました。教団三本柱の一つ目は「聖書信仰」。「宣教協力」「合議制」もここに依存します。先達の戦いの基盤の上に、私たちの聖書信仰は立っています。自分の神学が絶対という独善や、教職の言うことに任せればよいとの無気力はいけません。歴史的&神学的&文脈的に、真剣に探究&適用する中で、聖霊は働かれます。

宣学者や聖職者ではなく、無学な人々を用いて神のことばを取り次いだのが聖書です。取り次いだのは第一義的には人間の能力でなく、聖霊の働きです。だから私たちも暗い部屋でなく、聖霊の内的照明によって読むと理解します。デボーションでも聖書研究でも同じです。教職も信徒も、大人も子どもも、謙虚に内住の御霊に依り頼む祈り心に、聖書の字が平安の内に刻印されます。学問や奇蹟より先に、まず聖霊様今日も御言葉をと祈ろうではありませんか。

6 月 19 日

「みことばの適用」

Ⅱ テモテ 3:16-17

武安 宏樹 牧師

本書はパウロの獄中書簡最晩年に、愛弟子テモテに書き送った絶筆です。宣教スピリットを、豊富な経験に裏打ちされた必要&警告&励ましを通し、裏表なく全て引き継ぐ中で、最重要視するのが御言葉です(2:9,15/4:2,17)。以上の箇所は宣教を妨げる束縛や、破壊的論争、迫害、使徒の墮落、孤独、そういった懸念と対照されています。もはや指導する時間が残されていない。けれども昇天の主と引き換えに聖霊が降り、御言葉に委ねることができます。異邦人に宣教、信徒に弟子訓練。量&質的に実を結んでいくのが御言葉です。

パウロはパリサイ人として、家庭&学校&専属で律法教育を受けました。ユダヤ人の優秀さはこの教育ゆえですが、細かい解釈や適用は長けていても、民族宗教ゆえ、律法の全体像を把握し個人的に神を知るのには難しいようです。みなが律法の世界の住人ゆえ競争社会となり、異を唱えれば攻撃されます。かつて律法のエキスパート、悔い改めて以降も聖書的には同じことを語るも、主と出会う前後で 180 度変わったことは、律法が御言葉となったことでした。

どのように律法が御言葉となったか。かつて律法は立身出世の手段でした。だから反対者を死に至らす蛮行すら、世の中では忠実ゆえと評価されました。されどこの宗教生活には救いがなく、律法と自分が分裂していました(ロマ 7:)。聖なることばなのに、追求すればするほど、自分の罪深さが浮き彫りとなり、精進が足りぬと一層律法道にのめり込む。この悪循環は霊的に暗くなります。けれども主イエスとの邂逅で、彼は学徒&迫害者から使徒&殉教者に再生し、その時に御言葉が自分から近づくのではなく、捕えられるものになりました。

束縛に過ぎなかった聖書が、聖霊の息吹により枯れ骨に筋と肉がついて、活かす御言葉となった。「教え」「戒め」は教理的、「矯正」「義の訓練」は実践的。「教え」「義の訓練」は積極的側面、「戒め」「矯正」は消極的側面を意味します。以上のバランス取れた聖書教育は、ユダヤ教もキリスト教も変わりませんが、聖霊の働きを通して相互に循環して、出て行って語る中で実を結びます(4:)。御言葉は主の身丈まで「十分に整え」、真理は私たちを自由にします(ヨハ 8:32)。

6月26日

「中庸の徳」

伝道者の書 7:15-18

武安 宏樹 牧師

本書は人生の目的とは何か、生きる意味はどこにあるかを探究した書です。「空の空」(1:2)とありますが、仏教の無神論から来る色即是空とは正反対で、創造主を見失った人生の空しさを比喩的に表現しつつ、有神論を弁証します。また「すべての営みには時がある」(3:1)聖書に輪廻転生や偶然の思想はなく、神の定めるタイミングがある。誕生・回心・死・再臨もそうですが(Ⅱ ペテ 3:)、人の努力が不要というのは間違いです。「神を恐れよ」(12:)これが結論です。

上の全体像を踏まえ「正しすぎず悪すぎず、知恵ありすぎず愚かすぎず」に「ほどほど人生論」(ひろさちや氏)を連想しつつ、果して可能かと思えます。社会人も学生も厳しい生活をしています。だから忙しいので無理かといえば、そのぶん心の持ち様が問われます。キリスト者の強みは神との契約関係です。信仰生活は主と私の共同作業であり、100%自分で頑張らなくてよいのです。按分はできませんが感覚的には、未信者が10割目指して6割に留まるところ、私たちは祈りつつ最善を尽くし6割の出来でも、12割の達成イメージです。この共同作業の美点は、自分に持つ執着から解放され明るくなることです。主の歩みより前に出てしまうと、負の要素が出てきて霊的に暗くなります。

よって共同作業の客観的基盤は契約関係で、主観的基盤は聖霊の働きです。著者が「空の空」と表現した座に、聖霊の内住が期待されていたのではないかと。さらに言えば、このブランクを認めるかどうかが聖化にあずかる分岐点です。真面目な方ほどこれを敵視し、委ねて祈る前に手をつけて、うまくいかずに、燃え尽きます。けれども意外と「委ねる」とは、自身の明け渡しを要するので、過去における自分への赦しやいやしの適用に進むため、簡単ではありません。とはいえ聖霊による深層心理のいやしは、十字架を見上げて受けるものです。そして委ねる感覚を得て初めて、中庸の徳への重要な一歩を踏み出すのです。体得する手段は祈りしかありません。与えられた仕事にどこまで関われば、他に委ねるべき有能な人はいるのか、この仕事で主の栄光が現されるために、自分で頑張る思いを戒めて、聖霊を歓迎しつつ全体像と優先順位を期待して、祈ると自分の力みや固執が明白となり、軌道修正しつつ中庸をつかむのです。

7月3日

「にせ教師さばかれる」

Ⅱ ペテロ 2:1-3

武安 宏樹 牧師

1章結びは高尚な聖書論でしたが、本章はおどろおどろしい語が並びます。にせ預言者 & にせ教師 e.t.c. 「まさか私のことではないでしょう」(マタ 26:22) 主の弟子たちが不安になって聞き返すような心境です。文体は並行法となり、[A]使徒の権威(1:16-18)→[B]旧約の預言(1:19-21)→[B']にせ預言者(2:1a)→[A']にせ教師(2:1b-3)と続きます。よって1～2章は密な関係があります。にせ預言者(エレ 23:16/エゼ 13:10)もにせ教師も、神のことばを語るのではなく、聖書解釈や神学の枠組みを、人間的に受け入れやすく惑わす点で同じです。「御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのまま」(ユダ)「反キリスト」(Ⅱヨハ)つまり悪魔の性そのものですが、私たちはむしろキリストの人格を求めれば、おのずと見分けがつきます。「信仰→徳→知識…」の梯子のように(1:5-7)、聖霊に後押しされて生きるなら、私たちは主の身丈にまで成長できるのです。逆に「自分たちを買い取ってくださった主を否定」とは、意識的な反抗です。一見真面目な律法主義も霊的に自由に思える無律法主義も、中身は我欲です。生育が不遇で社会に敵意を抱き、頭の回る人は悪魔に利用されやすいのです。

そういう私たちも熱意ゆえ、聖霊に逆らって奉仕したこともありましたが、人が離れたり機会を失ったりと主の御手があり、悔い改めへりくだらされて、生き永らえています。他方で頑なに我が道に没頭する人は尻すぼみ傾向です。御霊に逆らうと変な力が出て、さらに世の中で認められると戻るのが難しい。名誉欲 & 権力欲 & 金銭欲 & 性欲など留まることを知りません。十戒の最後が偽証と貪欲で、他にも盗み & 姦淫 & 殺人など遡り、偶像礼拝に行き着きます。「彼らに対するさばきは、昔から怠りなく」羊と山羊の選別のように(マタ 25:32)行われます。救いは永遠の昔からの選びゆえ(エペ 1:4)、逆に棄てられる者もあるでしょうが、主の前に柔らかい悔い改めの心を持つ者はさばかれません。にせ教師が我が物顔で歩き回る背後で、エレミヤのように真理を叫ぶ者が、迫害を受けることがあれども、聖霊に導かれて語るならば平安があります。真理に立たない彼らの心は恐れしかないので、偶像にしがみつく悪循環です。権力も金も味方しても何かの奴隷のように嘘をつくのは、当然の帰結です。主は諸霊を怠りなくさばかれ、聖霊に依り頼む者をつまずきなく立たせます。

7月10日

「さばきと救いの御手①」

Ⅱ ペテロ 2:4-10a

武安 宏樹 牧師

① 霊界での御使いへのさばき(4節)

聖書で少なからず天使について語られますが、神学書での扱いは僅少です。御使いは神に奉仕する者ですから、礼拝対象となつてはいけません(コロ 2:18)。不可視ですが膨大で集団をなし、全知全能でなくても人間より力があります。逆にどこで墮落したか、神でなく自分に仕えることを選んだ墮天使もいます。その一部は地獄につながれ、他は自由を許容されて良い天使に対抗します。サタンは配下に悪霊 & 悪い天使を従え、自分では何も創造できない代わりに、彼らをフル動員し、創造主に反抗して自分の支配確立に日夜努力しています。その業績については H・シーセン博士曰く、1)偽る、2)試みる、3)奪い取る、4)悩ます、5)妨げる、6)ふるいにかける、7)擬装する、8)悪し様に訴える、9)病気にかからせる、10)人に入る、11)殺したり食いつくす、を挙げており、使徒たちは口を揃え、身を慎み目を覚まし立ち向かえと警告します(エペ 6:)。私たちは罪と世とサタンに勝利したキリストの血潮でのみ、勝利できます。この権威を私たちが行使する以前に、神は第二の死を備えています(黙 20:).

② 地上での全面 & 局地的さばき(5～8節)

二つ目にノアの洪水による全面的、三つ目にソドムとゴモラへの局地的なさばきがあります。私たちはノア一族以外滅ぼされた後の世に生きています。放置すれば罪人らがサタンの手先となり、義人を圧迫し世界を駄目にします。神はそれが耐えられずさばきを行います。逆に言えば義人が救われるため、ノアは罪の世に抗いました。彼らの苦難の上に今の私たちが救われたのです。5節の中心はさばき以上に救いです。霊的戦いより人の救いが主の関心です。洪水が世の終わりではなかったのも、戦後日本の教会が存続を許されたのも、徹底的に厳しいさばきと救いの御手の後に、救われるべき魂があるからです。グローバルな洪水のさばきでも、ローカルな町々の火のさばきでも同じです。ノアのような積極的信仰でも、ロトのように心を痛めて立ちすくむばかりの消極的信仰でも、御使いが手を引いて助けるならば私たちも随分気が楽です。さばきと救いの御手の寛容と忍耐、天使まで相働き益となることに驚きます。悪しき連合軍が総力を挙げても、摂理の御手の中で人が救われていくのです。

7月17日

「さばきと救いの御手②」

Ⅱ ペテロ 2:10b-16

武安 宏樹 牧師

世の中で民を踏みしめる為政者の横暴、教会で純朴な信徒を食い物にするにせ教師の存在に、なぜ彼らはそんな蛮行を取りつかれたように行うのか、不思議ではないでしょうか。私たちの対すべき相手はサタンですが(エペ 6:)、終わりの日にさばかれるのは、サタン&悪霊&墮天使だけでなく罪人もです。私たちは目に見えない悪霊と、目に見える世や人の双方を視野に入れながら、特定の組織や人＝悪と断定するのではなく、背後の霊的影響の精査が必要です。ペテロはにせ教師について、「理性のない動物」「のろいの子」「気違い」などと、表向き人間でも、中身は神のかたちとかけ離れた、猛獣同然と評しています。全ての人は罪を犯したことで神のかたちが毀損するも、理性や宗教性などの、動物と違った人間固有の性質は遺され、墮落とはいえ人間は特別な存在です。ただそれをどう用いるかは自由意志にかかります。自墮落で満足しないのは、罪深く悪霊に支配されているようでも恐れを感じるのは、良心の呵責です。聖霊は未信者は外から、信者は内から、罪深い生活を悔い改めに導かれます。

誰もが獣のような肉的な欲望で、抑えが効かない瞬間を経験したでしょう。罪の深みから救い出されるには、私たちが何者とされたか創造主を見上げて、素晴らしい神のかたちとされた特権を味わう以外に、ないではないでしょうか。罪なき御子キリストは、獣で代用されたいけにえ同様に十字架上で屠られた。これは罪の呪いからの解放、本来は神のかたちである人間に獣の印を押して、動物に過ぎない存在に引きずり込む、サタンからの解放ではないでしょうか。以上の恵みを与えた聖霊を拒んで、悪霊に恃む者に救いは遺されていません。神は私たちを自由意志から主体的に礼拝する者として、救いに導かれました。サタンは逆にそうしないと救われないと、奴隸的意志を強いて 仕えさせます。カルト政治&宗教&教会もそうで、権力信仰&拝金主義&宗教が一体化して、目に見える評価や見返りで人を測ります。心の内奥が解放されない証拠です。詩 139 篇は神のかたちが私たちの霊に形造られたことを、感謝する詩篇です。しかし 19 節から流れが変わり、血を流そうとする悪者への敵意に発展します。されど聖なる怒りで終わらず、「神よ。私を探り、私の心を知ってください。」心の内奥にある神のかたちに目を留め、自由の御霊により悪と戦いましょう。

7月24日

「さばきと救いの御手③」

Ⅱ ペテロ 2:17-22

武安 宏樹 牧師

① キリストを真に知ること(1章)

1～2章全体を眺めつつ、1章の「明」と2章の「暗」を比べたいと思います。本書の鍵語は「知識」ですが、神学的方法論以前にペテロの愛と謙遜が現われ、文面から身をもって「栄光と徳」(1:3)による、人格的成長を証しています。この知識と人格の成長は漠然としたものではなく、八段の梯子です(1:5-7)。徳を経て知識、さらに自制→忍耐→敬虔と続き、兄弟愛と神の愛に結実して、天守閣には十字架が輝き、単に段階的成長に留まらず全体像を提示します。近くも遠くも、各論も総論も、過去も未来も、地上も天も、両にらみが大事。以上の壮大なキリスト論は、彼が目で見えて体験したからこそ勧めています。加えて聖霊体験以前に、梯子の0段目たる聖書の御言葉に立脚する強さです。

② にせキリスト者の実際と末路(2章)

以上の要件を満たさない者がにせキリスト者で、愛も誠実も謙遜さも無く、自己中心な目的で、表面的な優しさや知識で、弱みにつけこむ不遜さです。いかに正統的信仰がつまらないか囁き、神秘的知識の発見を大げさに喧伝し、この道を通らねば地上の祝福を逃すだけでなく、御国に入れないと脅します。キリスト教史で、繰り返しのそのような教えが浮かんでは消えていきましたが、ペテロが信仰基準として提示した梯子から、徳をはじめ何か欠落しています。主イエスは荒野で、偽りと歪んだ聖書解釈と世の誘惑を拒否しました(マタ 4:)。神と富の双方に仕えるのも不可能と説きました(マタ 6:24)。にせキリスト者は、双方に要領よくと説きます。主のみ仕えたと聖霊が、二心に悪霊が働きます。

③ キリスト者の恵みと責務

私たちの歩みは二心で暗くなり、自分で知識を握っていないでしょうか。「堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい」(Ⅰペテ 5:9)とありますが、私たちは自分がいかに惑わしに弱く、罪を犯しやすい者なのか百も承知です。けれども直前に「へりくだり、ゆだねよ」(Ⅰペテ 5:6-7)とあるのは、幸いです。信仰のステップを踏めなくとも、謙遜であれば主が手を引いてくださって、余計な力から解放され、視野が広げられ、知識と人格と聖霊が噛み合います。基本的な土台と福音の全体像を常に確認して歩むことが、私たちの責務です。

7月31日

「叱責に立ち帰るなら」

箴言 1:20-33

井上 慎治 師

① 叱責に立ち帰るなら(22～23 節)

「わたしの叱責に立ち帰るなら(試訳)」この叱責は1章で語られてきた知恵、「主を恐れること」を目指してのもの。
「わきまえのない者」は叱責に立ち帰らない人で、主を恐れない者でもある。耳に痛い言葉に耳を傾けられない人は、みなわきまえのない者と疑われる。主の霊は、主のことばを知らせ教える霊。叱責に立ち帰るという心と存在の在り方を持つ人の内に宿り、自由に働いて、主のことばをその人の心には書き記す(エレ 31:33/イゼ' 36:26/Ⅱコリ 3:3)。

② 叱責を侮ったから(24～31 節)

わきまえのない者たちは主の叱責を拒み、顧みなかった。それゆえ、主は彼らを見捨て、災難と恐怖、苦難と苦悩の中に放置した。それは、人に侮られた主ご自身の慰めのためである。彼らの身に起こったことは、主の愛ゆえの叱責をことごとく侮ったためであり、彼らの自業自得である。

③ 聞き従う者は(32-33 節)

わきまえのない者は愚か者でもあり、自分が主に背いているなどと思ひもしない。その姿はまるで、預言者のことばを無視し、平安を信じていた王国時代のイスラエルの民のようである(エレ 6:14/14:13)。しかし、主のことばに聞き従う者、すなわち、耳に痛いことばに立ち帰り、そこに耳を傾け、主のことばを教える主の霊をその身に注がれた者には、主から与えられる揺らぐことのない平安がある。

[結論]

キリスト者であっても、わきまえのない者になっている可能性はある。神への信頼は、心の頑なさを砕かれた人のうちに宿る。人の言うことに耳を傾けられずに、主のことばに耳を傾けられることはできない。聖書に語られる慰め・癒し・回復は、苦しみを通して頑なさを砕かれ、謙遜さを得た人に向けられたことばである。耳に痛いことばにこそ真摯に耳を傾ける。そのような立ち帰りの歩みの中で、主の霊が、私たちを造り変え、主を信頼する者としてくださる。

8月7日

「不信の果てに」

I 歴代誌 10:1-14

武安 宏樹 牧師

サムエル記と違い、本書でサウルについてまともに記すのは本章ぐらいで、最高の王ダビデの引き立て役、最期は自ら腹を切る悲惨な落伍者の扱いです。けれども彼の存在意義は申し訳程度ではなく、長大な系図の後に最初に登場、彼の右肩下がりの人生が、捕囚へ引かれる主の民の将来を預言しているとも、言えますし、広い視点では罪深い彼から真の王への渴望へと読者を誘います。

何故サウルのように落ちぶれていく者が、イスラエルの王に選ばれたのか。最初は駄目人間ではなく、人格も家柄も容姿も大いに魅力的な青年でしたし、従来の士師による神権政治でなく、周辺国のように力を発揮できる王政をと、サムエルが顔をしかめるような、歪んだ期待が民全体にあったのも事実です。どこで脱線したのか。初回はサムエルの遅刻に伴う、犠牲の先払いでした。強大な敵陣を前に慌てた彼は、これは礼拝の不足が招いた危機と判断します。

危機に瀕して不安に陥るのは人間みな変わりません、選択を迫られるのは、可視的状況の打開のために手を打つ誘惑に乗るか、主を待ち望むかですが、サウルは犠牲を捧げて事態の好転を期す、御利益信仰が心の隅にあったのと、深層心理に罪深い自分が何もしなければ、神は顧みないという焦りがあって、要するに自分は愛されていない、いつか棄てられるという不信がありました。偽りの君のせいとも言えますが、不信を温存するか悔い改めるかは本人次第。恐らくペリシテ戦～アマレク戦にかけて、正常な霊的判断が破壊されました。

神の愛と御言葉を信じないことは、他の神々を認めるので第一戒違反です。ここまでは消極的不信ですが、主の代わりに霊媒に伺うのは積極的不信です。信仰不足ならまだしも、悔い改めで刈り取りを恐れて悪霊にすがらです。皮肉なことに霊媒で呼び出したのは、死亡宣告をもたらしたサムエルでした。ということは彼は絶えず御言葉を意識しつつ、まっすぐに向き合おうとせず、聖霊も悪霊もサムエルも霊媒も、利用する選択肢の一に過ぎなかったのです。八百万の神的な日本の霊性に、霊的御都合主義が横行していないでしょうか。主は御自分だけに聞き従う者を求め、そのような者に聖霊は祝福を与えます。

8月14日

「さばきと救いの御手①」

I 歴代誌 11:10-25

武安 宏樹 牧師

ダビデ王への主にある献身で功績を残した、勇士たちについて学びます。けれども三名が誰を指すか定かでなく、アビシャイとベナヤ以外は不詳です。優れた信仰者でも個人崇敬はNGですが、「あの三人には及ばなかった。」と、繰り返されるのは、彼らの献身が王国形成に資するところが多かったようです。

前章でサウル王は滑り出しこそまずまずでしたが、度重なる不信仰が祟り、最期は親族も側近も死の手が迫り、本丸の王自身が集中攻撃で追い詰められ、孤独に自死を選びます。罪の刈り取りは人々が散らされて、王朝が倒れます。創造主は「生めよふえよ」と社会命令を与えて、自分だけ生き残るのではなく、互いに支え合い愛し合って、犠牲を払い合う国家の建て上げを、命じました。サウルは主を愛することも人を愛することもせず、彼から人が離れたのです。対するダビデは最初のペリシテ戦こそ孤独でしたが、大巨人打倒に立候補し、「この戦いは主の戦い」(Iサム17:46)と積極的かつ果敢な信仰で勝利しました。これに心を動かされたヨナタンは、盟友の契約を結び生涯助け手となります。犠牲的な信仰が人を動かし、他にもミカル・アヒメレク・アビガイルらが助け、ついにはダビデのために献身を誓う、忠実な部下は600人に増し加わります。

信仰によってそのなすところみな栄えることを、本書は語っているようで、11～22章で人口調査の失敗を除き、ダビデ王朝の祝福が基調となっています。三勇士については誰かが問題ではなく、次章に至り数多の勇士名の列挙から、それだけどうしてもリストから落とせない、重要な働き手の多さを思いつつ、新約時代のキリストのからだとして、さまざまな器官と賜物から成る教会を、連想します。特定の名前が目立つのはあまり好ましいことではありませんが、歴史の中で献身的な牧師や信仰者の存在を通して、強固な共同体となります。三勇士は主君の叫びが、単に喉を潤すだけでなく戦況を左右する霊的欲求に、つながるものと察知し、命がけで敵陣を突き抜けていのちの水を運びました。感謝を通り越して恐れを覚えたダビデは、最高の犠牲として御前に捧げます。真実の礼拝は見える敵や見えない悪霊どもに勝利するよりも、はるかに尊い。「三K」でも、主の栄光が現される奉仕に犠牲を厭わずチャレンジしましょう。

8月21日

「最高の賛美」

I 歴代誌 16:8-36

武安 宏樹 牧師

①「みわざ」(8～14節)

ダビデはゴリヤテ戦や孤独な逃避行はじめ、悉(ことごと)く主の守りを想起します。私たちが祈りと賛美に入ると、まず主がなしてくださった感謝から覚えます。するとどれほど御業の多いことか、そして主がどのような方かが分かります。罪深い私が救われキリストの御業に感謝。八方塞がりでも奇跡的に道を開く聖霊の臨在に感謝。創造&統治&さばきに御手を動かされる父なる神に感謝。ダビデが喜びのあまり踊ったのは、日頃の感謝の御業の蓄積と爆発でした。

②「契約」(15～22節)

ダビデは与えられた御業と主の真実を、代々つなげる契約を想起します。「恵みを千代にまで」(十戒)「そのあわれみは代々にわたって」(マリヤの賛歌)この契約は自分個人以前に、永遠の昔から選ばれ、信仰の先祖が受け継いで、それが私まで届けられたという壮大な山並みです。卑賤な者も在留異国人も、救いの契約は開かれています。格差や偏見や絶望や孤独の真中で賛美します。世の不可効力でも、主に不可能はない。地低く～天高く貫く契約の賛美です。

③「賛美」(23～27節)

まず地上での御業を感謝し、次に地上と天をつなぐ契約の壮さを想起し、さらにダビデは天におられる神に栄光を帰します。全ては自分の力ではなく、ワンダフルな神の力、タイムリーな神の時、アンビリーバブルな神の愛です。罪人は自分の尊厳と力を気にしますが、私たちは神の尊厳と力を気にします。賛美に排他性はありません。人間だけでなく、山も海も太陽も獣も歌います。教会だけでなく異教徒の中でも歌います。賛美は宣教&証し&信仰告白です。

④「招き」(28～36節)

この賛美は具体的です。主の民の満足だけでなく、他もどうぞでは足りず、全世界が金も權威も時間も捧げて賛美せよと、異邦人&異教徒も対象者です。『私たちの救いの神よ。私たちをお救いください』国々島々悔い改め総賛美。まことに賛美は恐ろしく裾野が広い。喜んで賛美する人は、神の愛の広さ&長さ&高さ&深さを知る人です。全世界へ賛美の通りよき管となりましょう。

8月28日

「真の慰め手」

ルツ記 2:1-16

原 敏夫 師

① 絶望の中に伸ばされる神の御手

ルツとナオミはベツレヘムに帰って来ましたが、二人は頼る人がいません。その時ボアズが二人を助けるのです。神様はご自分の御手を直接伸ばされることも稀にありますが、通常人を用いられます。困っている時に、あの人のひとと言で慰められた、あの人の小さな行為で救われた、という経験を誰もが持っているでしょう。神様はあなたを用いられるのです。

② 自分の持てるものをもって人を助ける

ボアズはベツレヘムの名士(1節)であり大地主でした。ルツにここで落穂を拾うように命じ(8節)、水を飲ませ(9節)、収穫も保証します(16節)。そしてボアズ自ら、十分すぎるほどの麦を与えます(14節)。これは、ルツにとって夢のような親切でしたが、ボアズは何の痛みもありません。神様は私たちに犠牲を払うことを命じられる時もあります。ボアズがルツを妻に迎える時は、そうでした。しかし、ここでは、ボアズは自分の持てるものでルツに親切にしました。職場で、学校で、教会で、あなたの「おはようございます」という小さな言葉で励まされる人がいるはずです。そして、その方は一日、生きることができる力をあなたから得るのです。

③ 真の慰め手

それにしても、ボアズはルツに親切すぎないでしょうか？ ボアズは遊女ラハブの息子あるいは孫でした。彼は異邦人の血、しかも遊女の血を持っていました。このことに若いボアズはどれほど苦しんだでしょうか。しかし、彼は御翼の下に慰めを見出した(12節)。だから、異邦人であるルツに親切にしてあげたかった。そして、イエス様も苦しみを通られたから私たちを慰めてくださるのです(ヘブ 2:18)。今、苦しみの中を通っておられる方がいらっしゃるでしょうか？ その方はイエス様の代わりに真の慰め手となる準備をしているのかも知れません。なぜなら真の慰め手となる人はその苦しみを過去に経験した人だからです。

9月4日

「聖所を立て上げる」

I 歴代誌 22:1-19

武安 宏樹 牧師

本書の流れを辿ると、契約の箱安置に伴うダビデの壮大な賛美(16:)から、神殿建設の求めに対し、『主があなたのために一つの家を建てる』応答(17:)、そして御言葉の通り全ての敵を倒し(18-20:)、彼の戦いは大巨人で始まり、大巨人で幕を閉じます。前者は無名の少年、後者は王と立場は対照的ですが、信仰の純粋さは、少年時代に比べて王は内政 & 外交とも打算的にになりました。人は権勢が増すと難しいもので、この状況で人口調査の罪を犯します(21:)。行為自体は罪でなくても(民 1:17-19)、不純な動機を問われて砕かれました。自分では戻れない信仰の原点へ、神殿建設に先立って御手が働かれたのです。この神殿は、戦で諸国から奪った財による「ダビデ神殿」となることを認めず、子に委ねよと語られ、砕かれた彼は別の形で事業に関わることを決意します。

この神殿はどこに建てられたか。それは人口調査の罪のために民が打たれ、憐れまれた主が御使いを制止して、ダビデと長老たちがひれ伏した地であり、全焼 & 和解のいけにえを捧げて祭壇を築き、赦しの恵みを得た悔い改めの地、王として以前にダビデ個人の神との関係の建て直し、リバイバルの地でした。『これこそ、神である主の宮だ！』(1節)追い求めていた究極の神殿でした。王に不似合いな簡素な礼拝場、されど久しく忘れていた礼拝の恵みに酔った。自身の手による建築は止められましたが、聖霊は彼をいじけさせることなく、資材 & 人材の調達や、知恵 & 励ましを与える裏方として最大限の後方支援の、ヴィジョンを与えました。院政を敷いたり丸投げでなく、謙遜に子に仕える。自分の使命で建てる宮でなく、主の御名のために何でも奉仕する所存です。

私たちの聖所の建て上げはどうでしょう。個人的信仰生活、教会の交わり、時には新会堂建築。祈りと賛美の盛り上がり、彼方に、新しい幻や賜物が、注がれることもあるでしょうが、それだけだと罪の誘惑や世の試練に打たれ、容易に倒れる神殿となります。ダビデは自分の能力と熱意まで砕かれました。大事業の前に謙遜にされると、人の意見によく耳を傾け客観的に見えてきて、自分の計画が主の目に正しいか、当初思い描くのと違う計画が見えてきます。全て自分でという強迫観念から解放され、チームプレーの喜びが得られます。誰の功績とかでなく、主だけがあがめられる聖所を建てましょう(I コリ 3:)。

9月11日

「進んでささげる力」

I 歴代誌 29:1-9

武安 宏樹 牧師

ダビデは神殿建設の情熱を主に止められ、ソロモンの支援に専念します。干渉したり丸投げにせず、主に仕えつつパイプ役に徹する難しい役目ですが、彼の背中から捧げるリーダーシップを見ます。一言で言えば謙遜なのですが、一つ目にこの事業は、ダビデではなくソロモンがやれという主の任命でした。とはいえ子に力量はなく時間の無駄となり、部下任せでは主導権が混乱する。かといって父の言う通りやれでは、子の成長にならず存在感が発揮できない。そもそもアムノン&アブシャロム&タマルと、子の養育には失敗ばかりです。そこで主の命令という基本線に則って、子には仕様書や段取りの引き継ぎを丁寧に行い、部下には根回しをして、ソロモン体制確立のお膳立 てをします。知恵と人脈を駆使しつつ、自分が壁とならず推進力となるように努力をする。そこで民全体にチャレンジしたのが、「人のためでなく、主のため」意識です。退任する者として謙遜でありながら、神の事業のために自分に出来ることを、祈り、考え、鼓舞し、下働きする見事な引き継ぎに、練られた人格を見ます。

二つ目に王でありながら、主のしもべとして率先して捧げる姿を見せます。管理職側の動機付けだけだと、民は言われたことだけの受動的な仕事になり、逆に民全体の動機付けだけだと、管理職側に意見の齟齬や不信が生まれます。その両面に配慮した上で、王も管理職も民全体もみな同じ主のしもべであり、ダビデはしもべの代表として、惜しみなく主に捧げる者の模範を見せました。円に換算すれば億単位で収まらない、人間的常識を超えて馬鹿げた金額です。これぞ主を喜ぶ愛、親が子を思う愛、そのために惜しみなく捧げる献身です。けれどもこれこそ引き継ぎに際して、一番やりたかった喜びの捧げ物であり、人にではなく神に見てもらいたいものでした。彼の以前の賛美と祈りは主へ、下から上へ向けられましたが(16:)、上から下へという語弊がありますが、これまで求めていた天の栄光が、具体的に天と地を結ぶ「王国」を見たことで、恵みの豊かさに同意して地上に示して、再び天に返す循環となっています。だから天の恵みの循環に、ソロモンも管理職も民全体も入れられていました。背中で見せつつ、彼は牽引車でなく恵みを天に返す旗振り役となったのです。

9月18日

「主イエスの恵みによって」

使徒：15:1-11

布施 恒夫 師

(序)

初代教会においてエルサレムを中心とする宣教活動から周辺地へ。迫害によって北のシリアのアンテオケに、異邦人も加わる主の教会が導かれた。そこにパウロとバルナバがいた。

(Ⅰ)「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。』と教えていた。」(1節)

① 問題提起

異邦人信者もモーセの慣習に従って割礼を受けるべきと言う人たち

②パウロやバルナバは十字架の福音によって救いを受けることを伝えていたので、割礼は必要ないと、激しい対立と論争に。

③「この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに」

この問題提起は救いと行いの関係、福音の理解を問われる大事なこと

(Ⅱ)「そこで使徒たちと長老たちは、この問題を検討するために集まった。」(6節)

① ペテロのことば「兄弟たち。神は初めのころ、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされた」⇒百人隊長コルネリオ入信(10:22)

「神は、異邦人にも聖霊を与えて、何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださった」(8～9節)

②「それなのに、なぜ、今あなたがたは、父祖たちも私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです」(10節)

(Ⅲ)「主イエスの恵みによって救われた。あの人たちもそうなのです」(11節)

「恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出た ことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。」

9月25日

「永遠にわたる王国」

I 歴代誌:29:10-19

武安 宏樹 牧師

神殿建設を止められたダビデでしたが、彼は地上の王国が天と直結して、「天地(あめつち)ついには一つとならん」(讃 90)二つが一つとされる王国を待望します。この「王国」は完全 & 永遠 & 聖なる天と、不完全 & 有限 & 聖化途上の地上との、ダブル・ミーニングであり、彼は双方が分断ではなく二重構造と悟りました。あれほどの熱意を持っていながら、御言葉通り施主を息子に明け渡したのは、従順以上のものがあったからで、それは「不完全の恵み」を知ったことでした。神の恵みに目が開かれた者が次に来るべき反応は、己の卑小を知る謙遜です。彼は主に喜ばれたい一心で、自ら模範を示しながら莫大な財産を捧げました。そこに見栄を張ったり見返りを求める心はなく、信仰ゆえの純粋な献身です。神殿礼拝を通して民全体で臨在に触れたいと願う。されど適わなかったのは、地上の神殿は仮の姿であり、もっと素晴らしい神殿の存在を悟らせるためです。

結論から言えば、永遠の神を迎える神殿を造ろうとすること自体無謀です。最高の神殿建設のため民の財産も労力も接収し、止められたらあっさり断念。信仰のキーワードなしには成立しない、傍から見れば無鉄砲な政治手法です。そこまでして神に近づきたい。でも御言葉が止めるならそれが最善なのです。私たちはどうでしょうか。自分の奉仕の出来や評価が神を愛することよりも、下にあるでしょうか。自分が上だと完全を目指して緻密な仕事になりますが、こだわりが生じて霊的筋肉が弛緩します。神よりも世を愛しているからです。「異国人」とは世に生きつつ世の者でない、在留天国人キリストのことです。最高の神殿をと鼻息荒い自分とは何者か。クールな自己認識がありました。彼は建設断念と交換に、不完全な人間の背後の神の完全を受け止めたのです。

律法書で世で不安定な身分の者たちを、殊更に神が愛して守られるのは、彼らこそ神の保護が必要だからです。全財産を捧げた寡婦(やもめ)は知っていました。世では食えなくとも天からマナは降ると。彼女の姿から主の祈りを思います。「御心の天に成るごとく、地にも成させ給え。我らの日用の糧を与え給え。」これぞ常識を覆す祈り。世では頂点の王と最下層の寡婦(やもめ)が共有していました。神の前に裸になった心、真実 & 主体的 & 大胆に向かう心に王国は存在します。

10月2日

「知恵と知識が先立つ」

Ⅱ 歴代誌:1:1-13

武安 宏樹 牧師

本書はソロモン即位に至るまでの経緯は割愛し、盤石の継承に見えますが、内心は偉大すぎる父と比べて、小さな自分が務まるのか不安だったでしょう。だから神殿初建築(不動)に先立ち、モーセの天幕(移動式)を訪れ礼拝します。温故知新、御手が働かれた歴史探訪。謙虚に知恵を求める心がありました。モーセの霊前に手を合わせ、ダビデの言葉を唱和して平安を得るのではなく、生ける神に「今、知恵と知識を」そうでないとやっつけませんと懇願します。自分の不足を痛感することは、主を見上げ知恵と知識を求める上で有益です。

彼の祈りは御心に適っていました。富や名誉の欲もない訳ではないですが、それより民を正しく治める知恵と知識、そして主御自身を第一に求めました。すると主は「その知恵と知識はあなたのものとなった。」と答えてくださった。驚くべき答えです。富と誉れは瞬時に可能でも、知恵と知識は時間がかかる。けれども二世の洗練された信仰ゆえか、彼の願いは即座に適えられたのです。「求めよ。さらば与えられん」(マタ 7:7 文語)山上の説教は新約の信仰基準です。彼の願いは御心に適う祈りが不可能を可能にするという、そのひな型でした。今や知恵と知識は聖霊により内面化、私たちはもっと親しく求めるべきです。知恵と知識が外にあるか内にあるかの認識の違いで、天地ほどの差が出ます。「智慧(ちえ)と智(ち)識(しき)は已(すで)に汝に授かれり」(文語)以上は召しに従って備えられます。

ソロモンは知恵と知識だけでなく、他の富と財宝と誉れも約束されました。世の権力者が欲すのは富と名誉です。熟知する悪魔は主イエスを誘惑します。されど「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある」(マタ 4:10)御言葉の知恵と知識で世と悪に抗するキリスト者は、富と誉れは求めずとも必要なら与えられるという、無欲な生き方ができます。「まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡(すべ)て～加えらるべし。」(マタ 6:33 文語) なお深く求めれば、各論でなく主御自身を求める人格的な祈りへ昇華します。知恵と知識が先で、富と誉れが後ならば、悪魔のつけ入る隙を与えませんし、信仰の成長に従って与えられる後者を、主体的にコントロールできるのです。

10月9日

「栄光の充満」

Ⅱ 歴代誌:5:1-14

武安 宏樹 牧師

① 惜しみなく備えられた礼拝

本書は捕囚から帰還後、無気力で神殿再建に立ち上がらない民に(ハガ' 1:)、旧約時代の栄光の頂点である第一神殿建築を、回顧させる目的がありました。神殿建築など恐れ多いとの謙虚さと、だからこそ半端なものは造れないので、準備に3年、工事に7年をかけ、さらに厳選された人材と資材を増し加えて、「ウザ打ち」の失敗から(Ⅰ歴13:)、レビ人と祭司により箱運搬と設置を行い、特注楽器で正確無比の達人奏者による、一糸乱れぬ奉献礼拝が導かれました。圧倒的な雰囲気や霊的豊かさに目を奪われますが、真剣な準備と段取りから、主への愛と恐れゆえ最上のものを捧げようとする、礼拝の心が教えられます。

② 「二枚の板」に集中する礼拝

盛大な雰囲気の中で据えられた箱には、二枚の板しかありません(申 10:)。一枚目に十戒の前半(神と人の関係)、二枚目に後半(人と人の関係)が記され、主イエスは「神を愛し、隣人を愛する」最重要の戒めと語ります(マタ 22:37-40)。礼拝は誠実さや霊的空気より、何が対象で何を求められているかが大事です。捧げるべきものは多くとも、捧げる対象は三つに在し一つの神、二原則です。二原則は「十字架の縦&横」となって、キリストにあって結び合わされました。箱は捕囚以降所在不明ですが、天の神殿に安置されていました(黙 11:19)。二枚の板は十字架の真実を経て、今や信じる者の内なる御霊に刻印されます。

③ 歌声の一致した礼拝

全国から集結した達人揃いの聖歌隊は、神懸かり的に一致した賛美を捧げ、奏者のみならずイスラエルの全歴史が、ここに集約され単旋律の斉唱となり、諸々の感情と意志と知性が一つになり、世界と歴史の中心で礼拝を捧げます。指揮者なしには不可能ですが、賛美での自由と一致は両立します(Ⅰコリ 12:)。周到的準備も達人集めも御言葉への集中も大事ですが、そもそも何のためか。集う者全員にキリストの血が流れ、自由な聖霊の働きがあることが大事です。たしかに人間的には不完全ですが、最高の礼拝に主は雲をもって応じました。霊的眞実に答えがあります。神を愛し人を愛する礼拝者に栄光が現されます。

10月16日

「ソロモンの祈り①」

Ⅱ 歴代誌：6：12-21

武安 宏樹 牧師

① 神の無比性

ソロモンは特選の民を背にして、主に跪き両手を挙げて祈りを捧げます。「あなたのような神はほかにありません」は、自分の卑小さと民への憐れみの、双方を重ね合わせつつ、時至って神殿建設まで導かれた主の御名を讃えます。第一戒「ほかの神々があってはならない」(出 20:3)から、この告白に至るまで、犯した罪の数々はまさに偶像礼拝でした。神は不可視ゆえに困難を伴います。ソロモンの至高の祈りは、以降一切の罪を犯さない保証となりました。私たちは罪赦された罪人です。だからキリストの救いに入れられながらも、憐れみを求めて「汝のごとき神なし」と、絶えず告白しようではありませんか。

② 神の信頼性

無比性ともつながりますが、主なる神は契約と愛を守られる方です(14 節)。第二戒は罪の報い「三代、四代」の有限と、契約の愛「千代」の無限を語ります。この契約は神が一方的に結ばれた恵みの契約であり、無効にはなりません。父ダビデは心から主を愛して仕えましたが、罪を犯したこともありました。けれどもそこで悔い改めて赦しを求めたのは、契約の有効を確信したからで、放蕩息子が帰宅早々に祝宴と最上の服で迎えられたのも、愛の契約ゆえです。これによって大胆に御前に出て祈り、恐れや断罪的思いから解放されます。心が広くされて、多く赦された者として隣人を深く愛するようになります。

③ 神の超越性

前出の二点から、私たちは大胆にかつ親しく御前に近づくことができます。けれども神の偉大さ&崇高さ&聖さゆえ、距離感も覚えなければなりません。そうでないと恐れに欠けた馴れ馴れしい祈りで、神を制御する罪を犯します。ソロモンは無限の神を有限の人や神殿が、収容できないことを知っています。にもかかわらず建てたのは、天界と地上をリンクせんとした御言葉ゆえです。「地はわたしの足台」(イザ 66:1)ソロモンも民も私たちも足場職人と考えれば、主といかに親密な関係であろうとも、節操を失った祈りにならずに済みます。神に召された者は聖霊に祈られます。ソロモンを真似て祈ってみましょう。

10月23日

「カフェデモンク」

詩編 12:1-8

石川 正 師

熊本地震をはじめ、様々な災害に直面する時代に生かされている。キリスト者も例外ではない。

ダビデは主のしもべとして忠実に働いたけれども、サウル王の妬みを買ひ、逃亡生活を送ることとなる。

信頼できる者が消え去り、相互の不信感が広がって行く。権力者の傲慢な舌が聞きたくもない言葉、傷つける言葉をまくし立てている。

主は、聖徒の声に耳を傾けて聴いて下さる。聖徒は、主に心の内を文句を言うように語ります。

そのような聖徒に主は「混じりけのないことば」で語りかけて下さいます。

結論

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」(コロサイ 3:16-17)

10月30日

「ソロモンの祈り②」

Ⅱ 歴代誌 6:22-42

武安 宏樹 牧師

① 隣人に罪を犯した時(22～23節)

人と人との間に罪がある場合に、当事者で解決困難なことが多くあります。世の法は心の内まで罰することはできませんが、全知の神は公正にさばかれ、まず主の前に頭を垂れ、悔い改めといやしを得て話をする変わります。ソロモンは神殿を通して、人々の間に主が介入されることを祈っていました。

② 罪を犯して敵に打ち負かされる時(24～25節)

戦いに敗れることは不従順の実ゆえ、神に立ち返ることが必要と考えられ、私たちも生活態度の改善以前に、神との関係を顧みることはもっと大事です。ヨブは試練に際し消極的に立ち返るだけでなく、積極的に賛美を捧げました。③④ 天災&人災の時(26～31節)

自然災害や敵に制裁を受けることも、神の愛ゆえの懲らしめでもあります。これらを自分の罪や弱さとリンクして祈ることで、神の御手が分かります。自然も人間も同じ被造物ゆえ、罪の支配に御霊のうめきがとりなすからです。

⑤ 異邦人に開かれる時(32～33節)

ソロモンはイスラエル人のみならず、異邦人にも神殿が開かれるよう祈り、1000年後にキリストの贖いにより、隔ての壁が取り払われて現実となります。世界の民や貧者や弱者が足を運ぶ、恵みに満ちた聖所となる幻を祈りました。

⑥⑦ 戦いに出ていく時(34～39節)

とはいえ異邦人に救いの手が伸びることと、仲良くすることは別の話です。主が戦いに遣わす時には勝利し、異国の習慣に妥協すれば敗北を喫します。400年後の捕囚を預言して祈ったのは驚きですが、この神殿を向いて祈れば、遠くから主が祈りを聞かれる赦しの恵みを、知っていたのはもっと驚きです。以上の祈りといけにえは、火をもって受け取られ、栄光が宮に満ちました。ソロモン神殿は世界中の人を引きつけてやまずとも、収容はしきれません。けれどもキリストの大きな愛は、求める者全てを受け入れてくださいます。

11月6日

「主と一つになっているか」

」

Ⅱ 歴代誌 16:1-14

武安 宏樹 牧師

南ユダ三代目のアサ王は、前二代と違い、41年の長きに亘って政治的にも信仰的にも安定した時代を築きました。異教の神々を廃し神殿礼拝に努める、宗教改革の徹底ぶりは、偶像製作の罪を犯した王母をも容赦しませんでした。けれども見逃せないターニングポイントが、政権末期での外交的妥協でした。同胞である北王国の揺さぶりに対し、アラムに貢物を送って退治を依頼した。予見者の「あなたは、主に拠り頼みませんでした」(7節)が全てを物語ります。

北は南より150年早く滅びたように、偶像礼拝と不品行がひどかったため、北の純粋な民が南へ流出が絶えず、やがて南主体の再統一に危機感を持ったバシャ王が封鎖の手に出たのでしょう。よって明らかに南の方が優勢でした。だから人も物も北⇒南に流出に任せればよかったのに、アサは過剰に反応し、こともあろうに主に捧げられた物を賄賂に使い、北の退散後に残した資材で、これ幸いと新しい町の建築に充当するなど、総じて人間的計算が働きました。

結局アサ王の業績はどう評価すべきなのか。列王記では客観的記述に留め、本書は背後での予見者の叱責⇒王の迫害⇒両足の病気の、霊的因果関係まで踏み込んでいます。概ね好評を博した王の晩年の信仰のズレを記したかった。それはソロモン同様に内外の課題がなくなり、質量共に成長したと錯覚する、平和ボケが原因でしょう。クシュ人襲来の猛勢に比べれば、大したことない。ならば他所に片づけてもらおう。主への謙虚さも同胞への情も失われています。

とはいえ異邦人に救いの手が伸びること「人は自分の行いがことごとく純粹だと思う。心の高慢は倒れに先立つ。」ソロモンの言葉はアサの心を表現しています(箴16:)。在位中は守られるも、後の時代に南も霊的低下を招くことで、本章はやはり重要な位置を占めます。私たちは恐れなくてはいけません。数字や評価では信仰者の値打ちは計れず、生涯に亘って主に拠り頼む難しさを。祈りと御言葉の習慣化は良いのですが、マンネリを打破する訓練も求められます。主のための熱心と自分の熱心とが、見分けがつかなくなると肉的な奉仕に陥り、祈りよりも即断即決に走ります。「主は、その心のご自分と全く一つ」の、神&人の愛の関係を今日も求めます。

11 月 13 日

「気落ちせずに賛美せよ」

Ⅱ 歴代誌 20:1-23

武安 宏樹 牧師

南ユダ四代目の王ヨシャパテは、父アサ同様に善王に位置付けられますが、「彼はアハブと縁を結んだ」(18:1)つまり善王が悪王と手を結び暗転します。アハブに騙され巻き込まれた戦で、絶体絶命に陥るも御名を叫んで救われて、預言者に努力を評価された宗教改革を再開。失敗から信仰で立ち上がります。しかし結果的に主の恐れが後退した周辺諸国は、大挙して南王国を襲います。

この大軍はサタンの攻撃&主の怒りであり、ヨシャパテは必死に祈ります。敵の襲来に即座に反応する前に祈るとは、前の経験で学んだ立派な信仰です。それも自分だけ祈るのでなく民全体に命じ、そして主の宮に出かけて祈った。国家的危機に際して、神殿が天地をつなぎ全地にわたる場と覚えていました。ただ助け給えでなく、歴史に訴えて聖書的に祈らせるのは律法教育の実です。幼子と共に主を呼び求める。それこそが最高の礼拝教育だと知っていました。

ダビデの霊的戦いにソロモンの神殿奉献が加わり、御名を呼ぶ戦いの賛美。エリコ7周(ヨシ6:)、ミデヤン攻略(士7:)、獄中賛美(使16:)全てそうでした。「賛美は悪魔の軍隊を蹴散らす神の進軍ラツパ」(ルター)まず私たちが礼拝して、激励の御言葉が下り、応答の賛美もて攻略すると、恵みによる勝利を得ます。恐れて気落ちさせる失望落胆の霊に苛まれる時は、主のもとに行くことです。教会の礼拝堂で大声で賛美し、御言葉を宣言し、悪霊を追い出すことです。賛美で御手が動きます。以上の体験の蓄積で私たちの信仰の厚みが増します。

善王ヨシャパテはアハブとの同盟の失態後も、信仰により失地回復します。しかしまたしても、アハブの子アハズヤと同盟を結ぶ脇の甘さを露呈します。あの時の悔い改めが不十分だったのか。素晴らしい賛美礼拝を捧げたとしても、それさえも永遠の勝利を保障せず墮落が始まるのは、ソロモン同様皮肉です。信仰熱心&教育熱心&礼拝熱心のヨシャパテですが、どんなに努力しても、私たちは自分の弱さを処理できず、今日悔い改めても明日罪を犯すものです。けれどもそんな私たちの罪を、主イエスは十字架で贖ってくださいました。

だからもっと深い所から、そして絶えず賛美を捧げる者でありたいものです。

11 月 20 日

「主に立ち返る喜び」

Ⅱ 歴代誌 30:1-27

武安 宏樹 牧師

ダビデ&ソロモンを別格とすれば、南王国でトップレベルのヒゼキヤ王の信仰から学びます。即位数年前に北王国はアッシリヤに屈し南も主権を譲り、歴代の王は外交の利害関係の中で、主から離れたり戻ったり揺れていました。レビ人さえ偶像の祭司と墮す末期的状況に、就任早々悔い改めを宣告します。その迅速さは僅か 16 日間で神殿のきよめを完了し、全焼のいけにえを捧げて、南全体が主に背を向けていたことの悔い改めと、再献身と感謝を誓いました。

最初の月を負の遺産の一掃に注力し、祭司の配備も間に合わなかったため、過越祭は満を持して翌月に行われます(民 9:)。彼の治世は外交 & 内政以前に、悔い改めと礼拝再建の霊的整備に着手します。アサやヨシャパテと似ますが、100 年前より時代が悪化したことと、彼らの主を礼拝する国家づくりに対し、ヒゼキヤは逆に政治は国の霊性が是正されたら、どうかなると思えました。南だけの祝福に留まらず北にも声をかけ、過越祭参加を呼びかけたからです。

ヒゼキヤがアサやヨシャパテ以上に信仰者だったのは、課題の存在以前に、主が礼拝されていないこと自体に、悲しみ & 痛みを感じていることでした。士師を拒み王を求めたイスラエルは、ダビデ & ソロモン治世に頂点に達しても、以降の転落の歴史は、強い王権さえも人間の力では世を治められぬ証拠です。両巨頭の時代は上昇気流でしたが、明らかに衰退期に入るヒゼキヤの奮闘は、わが国の教勢の現況から親近感を覚えます。世に流され離れゆく同胞を覚え、それでも主を信頼し礼拝することが全てと、私たちは断言できるでしょうか。

何故この過越から始まる礼拝が、一週間延長を決めたほど祝福されたのか。それは「主の民は何処にしようが、どれほど罪深かろうが、みな出て来い。」南も北も外国人もウェルカムだと、公同の礼拝の霊的祝福があったからです。自分たちの赦された感謝は当然ですが、分裂と争いの相手と利害関係を越え、赦し合って主を見上げることこそ大事だと、王は確信していたのではないか。神殿のきよめ(29:)⇒過越(30:)⇒国全体のきよめ(31:)⇒アッシリヤ戦(32:)と祝福は拡大。悔い改めと礼拝から終末時代の霊的戦いに勝利できるのです。

11 月 27 日

「きよめの徹底」

Ⅱ 歴代誌 34:1-7

武安 宏樹 牧師

南王国でヒゼキヤと双壁の信仰王ヨシヤを扱います。曾祖父ヒゼキヤ死後、祖父マナセは最長 55 年の治世で、北に倣って史上最悪の偶像礼拝を行います。その背景にはアハズ同様、大国アッシリヤに取り入る目的がありましたが、南王国末期は信仰の純粋さを貫く方が、かえって国益を損なうため危険との、人の罪だけでなく、世の流れだけでなく、悪魔の仕業だけでなく三位一体の、霊的蟻地獄と化していました。そんな末期的状况に現われた王がヨシヤです。弱冠 8 歳で即位、16 歳で主を求め、ヒゼキヤよりも 5 歳若い 20 歳で改革着手。若さゆえ周囲を気にせず、右にも左にもブレず、悪魔の巣窟を叩き潰します。当初はその主語がみな「彼」とあるように、王自身が改革に突っ走る印象です。折しも難攻不落のアッシリヤが衰退し、南に政治的 & 宗教的に光明が差した。おまけに悪い時代に一掃されたはずの律法の巻物が、宮の奥から発見された。「時は来た！」個人的なミッションと摂理のタイミングが、ピタリ符合すると、主の御心であり時ならばやらない理由はないと、私たちは背中を押されます。ルターも同じく、改革者には共通してそのような単純率直な信仰があります。

改革者 & 原理主義者ヨシヤの最期は、エジプトに戦死する呆気ないもので、一言で言えば不要な戦に敢えて挑んだ犬死です。要因は彼のガチガチの信仰、異国の通過も許さぬとの国家主義、一方で戦えばヒゼキヤがアッシリヤ戦で大勝した如く、打ち破るはずとの楽観主義が彼を支配していたと思われます。けれども御声が異国の王の言葉を通してとの、想定外のところから来ました。それに気付かなかったのは、自分は正義で相手は悪との単純な公式によって、別の視点の導入や全体像の俯瞰が出来ず、制御不能になり自滅したからです。皮肉にも偶像礼拝追放を叫ぶ改革への熱心が、偶像と化していたのです。以後 20 年南王国はエレミヤの叫び空しく、捕囚に引かれ亡国の民となります。ヒゼキヤやヨシヤなど信仰王が共通し、功績を為した後に墓穴を掘ることに、批判的な分析ももっともですが、聖書記者は肯定的に記します(35:24-25)。国内世論はともかく外国の王は、ヨシヤの信じる主の聖なる力に驚愕します。彼らの熱心だけでは役不足でも、神殿再建～救い主の現れにつながる系譜は、もしも彼らがいなければどうなったか。後に功績がわかることがあるのです。

12月4日

「終わりの光景①」

Ⅱ ペテロ 3:1-7

武安 宏樹 牧師

本書はソロモン即位に至るまでの経緯は割愛し、盤石の継承に見えますが、内心は偉大すぎる父と比べて、小さくペテロは二書簡で、終わりの時代に来るべき迫害や異端に注意喚起しつつ、読者に初めから終わりに至るまで、全体的な視点を要求しています(1-2 節)。あざける者の言い分は再臨 & 新天新地への疑義と、現状世界の永続性でした。彼らへの反論として、まず主イエスの御言葉を引用することですが(マコ 13:)、普通の未信者には有効でも、反抗的な者には霊的な事柄は受け付けません。信者も不信者も同じ地に生きているので、被造物の事柄は共通の関心事です。人類史上各地で様々な災害や戦争が起こりつつも、世界が存続しているのは、人間の功績に見えます。神は創造以来丸投げではないかと仮定する理神論や、権力者や地域社会の要請でその都度、人や物が八百万の神々となる 汎神論は、共に最初と最後のどちらかまたはどちらも、現状の存続を前提としています。

「初めに神が天と地を創造」(創 1:1)つまり神は存在しても天地は存在せず、太陽も月もなく、水陸の別もなかった。地球は水陸別れて初めて成立します。その後に自然が出来て動植物が出来て、ようやく神に似せて人間が出来ます。人間が最初から居て文明も作ったなどとてもない。全てをお膳立てされて、生めよ増えよの文化命令によって、そこからやっと人間が社会を形成します。地球全体が神の御手で包まれています。加えてペテロは彼らの盲点を突いて、この御手は有史以来そのままではなく、シャッフルされたと言います(創 7:)。地上の不義の蔓延を憂え、空 & 海 & 陸の別をリセットしノア家以外滅ぼした。つまり信者も不信者も箱舟から出て、一般恩恵の上に生かされているのです。一度世の終わりでさばきがあった以上、二度は無いと言う方が余程迷信です。

結局のところ、彼らは目に見える世界の永続を願う迷信 & 盲信に過ぎず、偶像礼拝と不品行を止めない一方、内心さばきを恐れてなおも罪に耽ります。外濠を埋められて追い詰められているのは、終末に抵抗する彼らの方でした。水をもってシャッフルした主の御手は、火をもって地上を焼ききよめます。悪魔 & 獣の印の者 & にせ預言者が焼かれ、私たちは違う形で火を通されます。ペテロは十字架の失態で全身を焼かれ、聖霊降臨で人格がきよめられました。恐ろしい水 & 火のさばきも、キリスト者にとって救いと成長の恵みなのです。

12月11日

「終わりの光景②」

Ⅱ ペテロ 3:8-9

武安 宏樹 牧師

終末の遅延をあざける者へ、第二弾として天上と地上の時の認識の相違を、ペテロは語ります(詩 90:)。地上では太陽や月や季節の変化から時を刻んで、その長い短いというのは客観的なことのように、実際は主観的なものです。私たちは一日一日を大事に生きたいと願うも、日毎の雑事に忙殺されます。これが死にかけた人や余命宣告された人は、明らかに過ごし方が変わります。いつ世を去ってもよいように優先順位をつけ、残された時間を主に捧げます。本来は元気な者もそうあるべきです。誰でも一瞬一瞬死に近づくからです。いつ主が来られてもよいように、一日千秋の思いで主を待ち望みましょう。

その時について人間の刻み方はともかく、神はどのように刻まれるのか。世の中や異端は終末を「XXXX 年 XX 月 XX 日」と、直線的な時の流れを想像します。そのような「予言」で恐怖を煽り、影響力を行使する偽教師は後を絶ちません。これは神認識の単純さに起因します。旧約時代の選民の扱い方にあるように、神は愛と義を高次に両立させる方であり、私たちは信仰による霊的交わりを、御言葉から学び体験しなければ知ることができぬほど、偉大で深遠な方です。9節は信者にも不信者にも驚くべき御言葉です。遅延は神の側の不備でなく、「われわれの救いのためであり、われわれに対する配慮」(カルヴァン)だからです。神は全ての者が救われることを忍耐して待っており、彼らも例外ではない。遺棄は神があらゆる策を講じて、頑なに救いを拒む者への最終手段です。

家族や友人の救いを祈りつつも、なかなか救われず悩む人も多くいます。けれども神の御性質が全能であり、愛と義の御方であることを覚えましょう。魂の救いも悪者のさばきも、神がタイマーを調節しつつ努力しておられます。私たちの祈りと共に、聖霊が心の扉を叩いて救いに最善の時を用意されます。とはいえ救いの扉は無制限に開かれているかといえば、そうではありません。同時に戦闘の教会に生きるキリスト者を携え上げる、至福の時も計られます。柔軟な御手の中で、あざける者には光陰矢のごとし、何とかして一人でもと、再臨まで宣教と敬虔に励む者には、一日は千年のように豊かに用いられます。私たちの時間で一喜一憂するのではなく、御手に期待して福音を伝えましょう。

12 月 18 日

「終わりの光景②」

Ⅱ ペテロ 3:8-9

武安 宏樹 牧師

終末の遅延をあざける者へ、第二弾として天上と地上の時の認識の相違を、ペテロは語ります(詩 90:)。地上では太陽や月や季節の変化から時を刻んで、その長い短いというのは客観的なことのように、実際は主観的なものです。私たちは一日一日を大事に生きたいと願うも、日毎の雑事に忙殺されます。これが死にかけた人や余命宣告された人は、明らかに過ごし方が変わります。いつ世を去ってもよいように優先順位をつけ、残された時間を主に捧げます。本来は元気な者もそうあるべきです。誰でも一瞬一瞬死に近づくからです。いつ主が来られてもよいように、一日千秋の思いで主を待ち望みましょう。

その時について人間の刻み方はともかく、神はどのように刻まれるのか。世の中や異端は終末を「XXXX 年 XX 月 XX 日」と、直線的な時の流れを想像します。そのような「予言」で恐怖を煽り、影響力を行使する偽教師は後を絶ちません。これは神認識の単純さに起因します。旧約時代の選民の扱い方にあるように、神は愛と義を高次に両立させる方であり、私たちは信仰による霊的交わりを、御言葉から学び体験しなければ知ることができぬほど、偉大で深遠な方です。9 節は信者にも不信者にも驚くべき御言葉です。遅延は神の側の不備でなく、「われわれの救いのためであり、われわれに対する配慮」(カルヴァン)だからです。神は全ての者が救われることを忍耐して待っており、彼らも例外ではない。遺棄は神があらゆる策を講じて、頑なに救いを拒む者への最終手段です。

家族や友人の救いを祈りつつも、なかなか救われず悩む人も多くいます。けれども神の御性質が全能であり、愛と義の御方であることを覚えましょう。魂の救いも悪者のさばきも、神がタイマーを調節しつつ努力しておられます。私たちの祈りと共に、聖霊が心の扉を叩いて救いに最善の時を用意されます。とはいえ救いの扉は無制限に開かれているかといえば、そうではありません。同時に戦闘の教会に生きるキリスト者を携え上げる、至福の時も計られます。柔軟な御手の中で、あざける者には光陰矢のごとし、何とかして一人でもと、再臨まで宣教と敬虔に励む者には、一日は千年のように豊かに用いられます。私たちの時間で一喜一憂するのではなく、御手に期待して福音を伝えましょう。

12月25日

「私たちの主であり救い主キリスト」

Ⅱ ペテロ 3:14-18

武安 宏樹 牧師

① 「キリストを知る」

私たちはどのようにキリストを知ったでしょう。信者家庭は胎内から教会、未信家庭は何かのきっかけで、いずれにしても心の扉を叩かれる聖霊の声に、自分なりに応答し、全ての罪を悔い改め、人生を明け渡したことでしょう。ペテロも巷で噂の救い主との邂逅に、一晩の不漁が一瞬で大漁となる奇蹟で、力ある御業に恐れ入った一方で己の小ささを思い、入信&献身を決心します。誰でも最初は自分本位の求道ですが、それでも主イエスは門前払いしません。門戸が広く開かれているのは、一人でも滅びてほしくないからです(ヨハ 3:16)。

② 「キリストと生きる」

ペテロは一番弟子として常に行動を共にし、主イエスと生きていましたが、心の中は認められたい思いから、高揚感と恐れのアップダウンの連続でした。そんな彼は十字架を前にして師を否むという、恥ずべき自分につまずきます。どこまでも主に従いたいと願っても、ついて行くことが許されぬ領域がある。なぜなら私たちは神ではないからで、人間的な限界を受容せざるを得ません。「神の愛で～」再献身の招きにも、「兄弟愛で～」と応じるのがやっと(ヨハ 21:)。されどこの敗北感から、「行きたくない所へ行く」神主導の人生が始まります。そして自分は何者か&何のために生きるのか、愛の絆の中で明確になります。

③ 「キリストが来られる」

三つ目に大事なことは、いつ主が来られてもよいように待ち望むことです。主を知って生きるだけでは、終わりの時代の激しい戦いで疲れてしまいます。良い意味で私たちに緊張感を持たせるのは、明日来るかもしれない期待です。罪の縄目は入信時に解かれ、性質は徐々に聖化され、主の訪れまで頑張ろう、主の喜ばれることを最大限しようと思います。信仰成長と共に成長しますが、だから自分の信仰が正しいのだと高慢になることを、主は忌み嫌われます。私たちの信仰の目的は救霊&証し&善行の量でなく、主の前にどう在るかで、これは自分なりの願いやマニュアルを手放し、祈りと黙想なしに見えません。信仰生活＝障害物競走ですが、本年聖句「恵み&知識」から振り返りましょう。